

382
86

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

始



182-86

荆教相關論

大谷大學長 南條文雄先生序
文
草野臣僧 光弘祐言師著

東洋佛教學會發行

大正
9. 3. 24
内交

序

光弘祐言君ハ名古屋監獄ノ教務所長トシテ、教誨ニ従事セラル、コト年アリ、我ガ眞宗大谷派ノ監獄教誨師中老練ノ人ナリ。公務ノ餘暇ヲ以テ、刑教相關論ヲ著ハシ、刊行シテ後ノ學者ニ資セントシ、余ニ序ヲ徵サル、余ハ自ラ其任ニ非ザルヲ知り、固辭スレドモ聽カレズ。因リテ其稿本ヲ一讀スレバ、序論本論各三章アリテ、每章數節ヲ分チ、古今東西ノ刑法及ビ監獄ノ沿革ヲ序論トシ、行刑ノ要素ト教誨ノ要旨トヲ本論トシテ、反覆丁寧ニ之ヲ論述シ、實驗ノ事實ヲモ縷述セララル。監獄ノ教誨ニ従事スル後進者

ヲ益スルコトハ、信ジテ疑ハザル所ナリ。タトヒ其事ニ從ハザル者ト雖モ、之ヲ讀ミテ其要ヲ知ルコトヲ得ベシ。抑本邦歷代天皇ノ一視同仁ノ聖旨ハ、佛陀ノ平等ノ慈悲ト一致ス、監獄ノ改良モ此ノ聖德ニ由來スルトアレバ、教誨ニ從事スル人ハ、先ヅ常行大悲ノ現益アル金剛ノ眞心ヲ獲得シテこそ、此ノ爲人ノ大事業ニ參加シテ成功ヲ奏スルコトヲ得ラルベケレ。況ンヤ眞宗ノ平生業成ノ教義ハ、能ク死刑者ヲシテ、刑期ニ先キダチ、豫メ安心立命ノ地ニ達セシメ得ベシトアルニ於テチヤ。此等ノ語ハ、信念ノ確實ナル者ニ非ザレバ言フコト能ハザル所ナリ、是ニ於テカ君ノ國恩ト佛恩トニ報ゼントスル自信教人信ノ

熱情、溢レテ此ノ好著述ヲ成セリト感ズル所ナリ。余ハ各地ノ監獄ノ教誨ヲ爲セシコト一再ニ止マラズト雖モ、此書ニ謂フ所ノ要訣ヲモ知レルニ非ズ、今ニシテ之ヲ思ヘバ、誠ニ忸怩タラザルヲ得ズ、故ニ此ノ書ヲ通讀スルモ、敢テ一辭ヲモ替スルコト能ハズ、唯君ノ此ノ著ニ由リテ、刑教相關ノ詳細ヲ知り得タルヲ喜ビ、此ノ一篇ヲ草シテ其責ヲ塞グコト、ス。

大正八年十二月十六日

南條文雄識ス

刑教相關論緒言

現今刑法及監獄法規等ノ講義録ハ、何レノ書店ニ於テモ堆積シテ山ノ如シ、然レドモ專ラ教誨ト刑罰ノ關係ヲ詳論シタル所ノ著書ハ未ダ曾テ是レ有ルヲ聞カズ、依テ後學者ハ教誨ト刑罰ハ如何ナル關係ヲ有スルカ、或ハ教誨ノ起因、教誨ノ主義、教誨ノ要訣、教誨ノ方針等ニ至リテハ異說區々ニシテ、其岐路ニ迷フモノ尠カラズ、於茲乎予ハ淺學菲才、固ヨリ其器ニアラズト雖モ、公務ノ餘暇ヲ以テ、聊カ教誨ト刑罰ノ關係ヲ論ジ、後學者ノ參考ニ供セント欲シ、之レヲ本書ニ輯メ、名ツケテ刑教相關論ト題ス。

本書ノ主トスル所ハ平易簡約ニ、教誨ノ起因、教誨ノ主義、教誨ノ要訣、教誨ノ方針等ヲ詮顯スルニアリト雖モ、其目的ヲ達スルニハ、順序トシテ勢ヒ各國ニ於ケル刑法及行刑監獄等ノ沿革ヲ知ラザルベカラズ、故ニ序論ニ於テハ洋ノ東西ニ涉リテ其一斑ヲ概論シ、本論ニ至リテハ正シク教誨ニ關スル要旨ヲ論定シタルモノナリ、然レドモ其足ラザル所、其及バザル所、其缺クル所ノ罪ハ多大ニシテ、必ラズ識者ノ笑ヲ招クベシト雖モ、予ハ同僚ノ勸告トス道貢獻ノ微衷制シ難キニ據リ、此ニ刊行ヲ決シ、以テ之レヲ同僚諸士ニ分タント欲ス、讀者若シ裨益スル所アラバ予ガ幸甚コレニ過ギタルハナシ。

二

大正八年十月十日

著者 光弘祐言誌

附 言

本書ノ刊行ハ斯道ノ爲ニシテ營利ノ業ニアラサルカ故ニ、之ヲ非賣品ト爲ス、然ニ現時ハ物價ノ騰貴ニ依リ多大ノ刊行費ヲ要スルニツキ、初志ヲ貫徹スルコト能ハサリシニ、幸ニ知友恆禪君ノ篤キ同情ニ依リ、之カ刊行費ノ全部ヲ寄附セラレタルヲ以テ、其目的ヲ達シ得タルモノナリ、茲ニ之ヲ録シ、聊カ感謝ノ誠意ヲ表ス。

三

刑教相關論目次

第一編 序論

第一章 古代ニ於ケル各國ノ行刑

第一節 日本ノ刑法一斑	一
一 法制ノ變遷	一頁
二 古代不文法時代ノ刑法	五頁
三 古代成文時代ノ刑法	六頁
第二節 支那ノ刑法一斑	一〇頁
第三節 泰西ノ刑法一斑	一一頁
第四節 各國ニ於ケル監獄ノ一斑	一二頁
第五節 概論	一四頁

第二章 中古ニ於ケル各國ノ行刑

- 第一節 日本ノ刑法一斑……………一七頁
- 第二節 泰西ノ刑法一斑……………一八頁
- 第三節 刑法ノ主義改良ノ動機……………一八頁
- 第四節 各國ニ於ケル監獄ノ一斑……………二二頁
 - イ日本 ……ハ佛國
 - ニ普國 ……ホ和蘭 ……ヘ白耳義
- 第五節 監獄改良ノ發展……………二九頁
- 第六節 萬國監獄會議ト教誨ノ開始……………三五頁
- 第七節 概論……………三六頁

第三章 近代ニ於ケル各國ノ行刑

- 第一節 日本ノ刑法一斑……………三七頁
- 第二節 泰西ノ刑法一斑……………三九頁
- 第三節 各國ニ於ケル監獄ノ一斑……………四〇頁
- 第四節 概論……………四八頁

第二編 本論

第一章 刑法ト教誨

- 第一節 刑罰發達ノ順序……………五一頁
- 第二節 刑罰ノ原因ト其目的及時代ノ關係……………五四頁
- 第三節 行刑ノ主義ト其効果……………六八頁
- 第四節 行刑ノ要素ト教誨……………七九頁
- 第五節 死刑ト教誨……………八二頁

第二章 教誨ノ要旨

第一節 教誨ノ原語……………八九頁

第二節 教誨ノ意義……………九三頁

第三節 教誨ノ要訣……………九八頁

第三章 教誨ノ主義

第一節 道義ト宗教……………一〇一頁

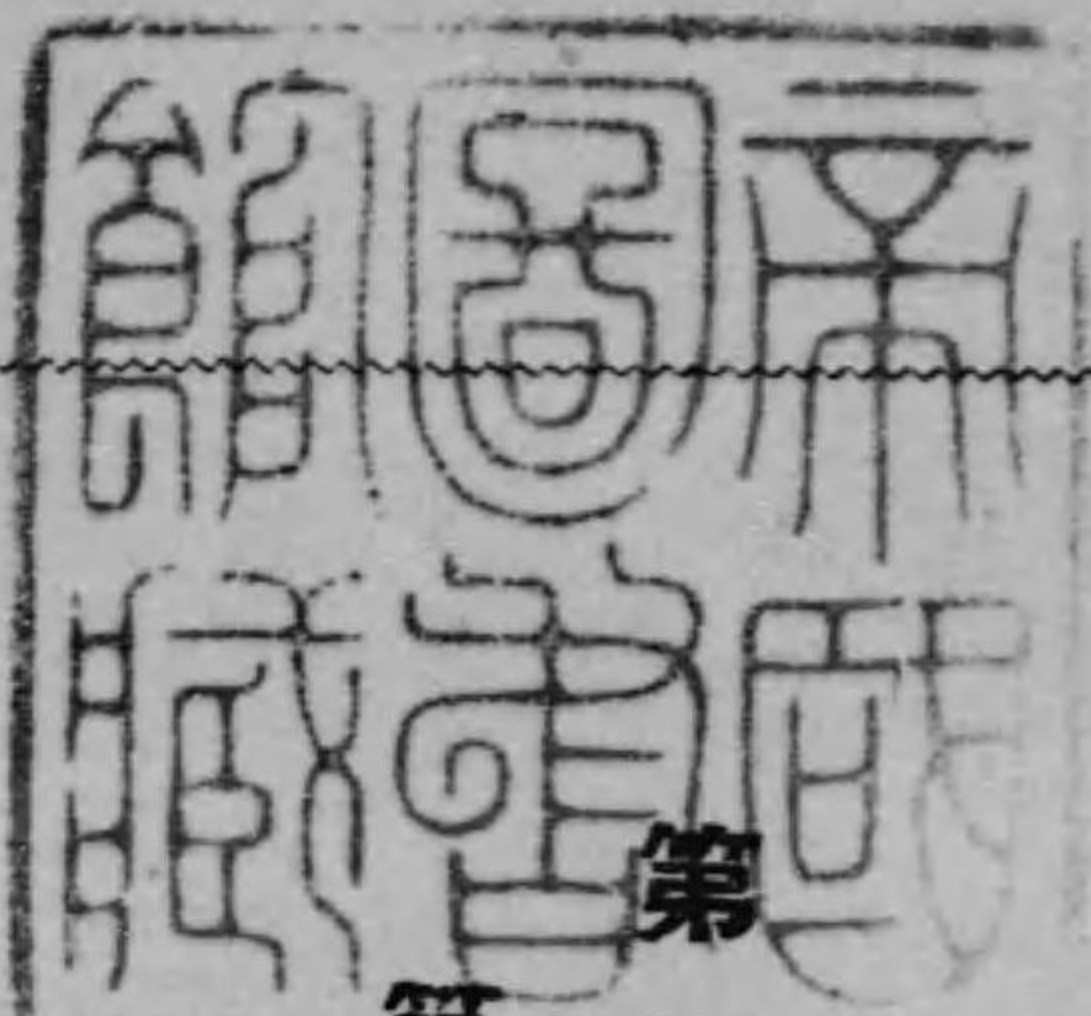
第二節 教誨ト信教ノ自由……………一〇三頁

第三節 結論……………一〇七頁

刑教相關論目次畢

刑教相關論

光弘祐言著



第一編 序論

第一章 古代ニ於ケル各國ノ行刑

第一節 日本ノ刑法一斑

一 法制ノ變遷

太古ハ法制トシテ別ニ成文ノ徴スベキモノナシ由來法制ナルモノハ不
文法ノ時代ヨリ成文法ノ時代ニ進ムト云フハ法律學上一般ノ原則デアリ
テ我國ノ刑法モ無論此原則ニ隨ツテ居ルノデアアル故ニ漢字ガ我國ニ這入

ル以前即チ開國以來、應神天皇ニ至ル迄ハ如何ナル文字ガアリシヤハ不明ニシテ、先ヅ漢文ノ前ニハ文字ガナカツタト云フ斷案ヲ下スヨリ外ハナヒ、果シテ然ラバ神武天皇ガ我ガ帝國ヲ創立シ給フヤ、之レト同時ニ、國家ノ組織ヲ定ムル不文ノ憲法ガ成立シテ居ツタト認ムルノモ當然ノ理デアリテ、刑法ノ如キ統治上一日モ缺クベカラザル法制モ、亦不文ノ状態ニ於テ漸次發達シ、人民相互ノ關係ヲ規定スル法制モ、慣習法トシテ存立シタニ相違ナヒ、而シテ法制ノ著シイ發達ハ儒教ト佛教ノ影響デアリテ、即チ佛教ノ傳來ト共ニ支那ノ文明ガ益々輸入セラル、ニ及ビ、人智ノ進歩ト社會ノ發達ニ伴ヒ、諸般ノ法律モ亦益々發達シタノデアルカラ、開國以來、推古天皇ノ朝ニ至ル迄ハ、未ダ文字ニ依ツテ法律ヲ明定スルニ至ラザリシ、之レヲ我國法律ノ不文法時代ト云フ、而シテ推古朝以後ハ、成文時代ニ進ミタレドモ、法制ノ變遷ハ、漸次三期ニ分レテ居ル、即其第一期ハ支那法制ノ繼受時代ニシテ、推古朝ヨリ鎌倉幕府開設ノ時ニ至ル迄ナリ、此間ハ我ガ立法上ニ於ケル支

二

那法繼受ノ時代デアリタ、例ヘバ聖德太子ノ憲法ハ、儒教及佛教ノ教旨ト、隋朝ノ制度トヲ咀嚼シテ制定シ、孝德天皇ノ大化ノ制令モ概ネ唐朝ノ法制ヲ繼受シ、天智天皇ガ藤原鎌足ヲシテ撰定セシメラレタ近江令廿二卷、(後世ニハ傳ハラザリ)並ニ文武天皇ノ大寶律令、元正天皇ノ養老律令、又ハ嵯峨、清和、醍醐、堀川ノ各朝相次デ弘仁格式、貞觀格式、延喜格式、貞永式目等ノ制定アリシモ、孰レモ支那法繼受デアル、第二期ハ武家制法時代ニシテ、(コレモ法制ノ系統ハ支那法ニ屬ス)源賴朝ガ幕府ヲ立テ、從來ノ政治組織ヲ一變スルト共ニ、諸般ノ法律モ共ニ變更シタ事ハ勿論デアル、併シ此源氏三代ノ間ハ別ニ成文法ノ制定ヲ見ルニ至ラズ、北條氏ガ源氏ニ代ツテ政權ヲ握ルニ至ツテ、貞永式目又ハ御成敗式目(堀川朝ナリ)ト云フモノガ出來テ居ル、是ガ我國法制ニ於テ最モ必要ナモノデアリタ、即チ此五十一箇條ノ貞永式目ガ、室町幕府カラ江戸幕府ヲ經テ傳ハツテ居リタノデ、鎌倉室町江戸ノ三幕府ノ基本的法制デアル、ソレガ漸次追加サレテ北條氏ノ時代ダケデモ三百六十二箇條、足利氏ノ時代ニハ二百六十

三

一箇條追加サレテ、最要最大ノ法制トナツテ居リタ、足利氏ノ後ハ亂世デアツテ、諸侯各自ニ法制ヲ立テ、居リタレドモ、之レハ國家ノ法制デハナヒ、又徳川氏ガ江戸開府ノ後ハ、諸公家法式五箇條ヲ定メ、武家諸法度十三箇條及禁中方御條目十七箇條ヲ設ケラレタ、コレハ大抵代々ノ將軍ガ時勢ヲ斟酌シテ制定シタノデアリテ、武家ニ取リテハ極メテ必要デアツタ、又一般人民ニ對シテハ、觸レ書、又ハ高札ノ方法ニ依テ其守ルベキ所ヲ示シタノデアル、又八代將軍吉宗ガ制定シタ御定書百箇條ハ最モ必要ナモノデアツタ、斯ク武家制法時代ニ於テモ、大約如上ノ變遷ヲ經テ居ルノデアル、

第三期ハ歐羅巴法制ノ繼受時代ニシテ、是ハ明治革新以後デアル、即チ明治五六年ニ、至テ初メテ刑法ノ範圍ニ於テ、歐羅巴ノ法制ヲ繼受スル様ニナツテ來タ、而シテ明治十三年ニ改正シ、同四十一年迄施行セラレタル刑法ハ、多ク佛蘭西法ヲ取リタルモ、其後社會ノ變遷ト、刑法學及刑事政策ノ進歩トニ促サレテ、明治四十年ニハ更ニ之レヲ改正シ、同四十一年十月一日ヨリ實

施セラレタル刑法(現行法也)ハ主トシテ獨逸刑法ヲ參酌シテ大修正ヲ加ヘラレタルモノデアル、其ノ他ノ諸法律モ大約獨逸法ガ土臺ニナリテ居ル、是レ我國ニ獨逸法ノ盛ナル所以デアリテ、現今我國法律ノ半分ハ獨逸法、残り半分ハ佛蘭西法ト我國ノ實情トガ基礎ニナリテ居ル、從來久シク支那系統ニ屬シテ居ツタ我國ノ法制モ、今日デハ歐羅巴就中獨逸ノ系統ニ屬スルコトニナリテ來タノデ實際ノ事情ニ合ハヌコトハアレドモ、外形上カラ云ヘバ、現今ノ法制ハ、成文法ノ全盛時代ニ到達シテ居ルト謂ツテ宜シイノデアル、

二 古代不文法時代ノ刑法

以上我國ニ於ケル法制ノ變遷スノ如シ、蓋シ古代ノ不文法時代ト雖モ、不文ノ刑法トシテ、收贖解除ノ法アリシコトハ明瞭ニシテ、之ヲ國史(日本書記等ニ依ル)ニ徴スレバ、天照太神ノ御時、素盞鳴尊罪ヲ得シニ依リ千座置戸ヲ科シ、其爪髮ヲ拔テ罪ヲ贖ハシメ、天兒屋命ヲシテ其解除ノ太諄辭ヲ掌リ、之ヲ宣セシメテ根ノ國ニ逐ハシメラレ、又太神統一ノ後ハ天兒屋命ノ裔、世々國民ノ犯

セル罪ヲ解除スルコトヲ掌リ、其罪名トシテハ、天ツ罪、國ツ罪ノ二稱ガアリ
 タ、其後 神武天皇即位ノ元年ニハ、罪名若干條ヲ定メ、罪ノ輕重ニ從ヒ贖物
 ヲ徴シ、ソレヲシテ神明ニ誓テ拔除シ、惡ヲ去リ善ニ遷ラシム、若シ其元惡大
 怒始終悛ムルナキ者ハ、物部氏ニ命ジテ之レヲ戮セシメ給ヘリトアリ（惡成
 化ト相伴ヒ、誓神拔除去惡遷善ノ意ハ、現今ノ宗教的教誨ニ符合スルモノ歟）
 崇神天皇即位十年ニハ、武埴安彥、出雲振根ヲ誅シ
 給ヒ、履仲天皇即位元年ニハ、仲ノ皇子ノ謀反ヲ平ラゲ、此亂ニ連累シタル
 阿曇連濱子等ハ其罪死ニ當ルモ之レヲ宥メ、黜シテ、從タル者ハ役使ニ供セ
 ラレタ（囚徒役使ノ囑矢也）允恭天皇ノ朝ニハ、流刑アリ、雄略天皇ノ朝ニハ左降、除名、沒收
 焚殺等ノ刑アリ、清寧天皇即位四年ニハ天皇親カラ囚徒ヲ錄シ給フトア
 リ、崇峻天皇ノ朝ニハ梟刑アリ、其訴訟ヲ斷スルニ盟神探湯ノ法ヲ設ケラ
 レタ、此法ハ泥土ヲ釜中ニ沸騰セシメ、手ヲシテ探ラシメテ其曲直ヲ決スル、
 ノデアル、コレ即チ古來ノ慣法ニシテ疑獄ノ時ニノミ用井ラレタノデアル

三 古代成文時代ノ刑法

我國成文ノ刑法第一期ハ支那法繼受時代ニシテ、推古天皇即位十二年
 肇メテ憲法十七箇條ヲ定メ、廿八年ニハ制シテ曰ク、君后ニ不忠ニ考妣ニ不
 孝ナル者アラバ必ラズ告ゲヨ、若シ隱サバ同ジク其罪ニ處シ重ク刑罰ヲ科
 セント、成文ノ法コレヲ以テ嚆矢トス、孝徳天皇即位五年ニハ、始メテ八省
 百官ヲ置キ、其八省中ノ刑部省ニ囚獄司ヲ置キ、刑部卿ノ監督ニ屬セシメラ
 レタ、是即チ囚獄ノ監督廳ヲ規定セラレタル始メデア（現今監獄ヲ司法省ノ直轄ト
 スルコト之レト符合セリ）
 文武天皇ノ朝ニハ、大寶律令十七卷ヲ刊修セラル（律六卷、令十一卷アリ、コレヲ大寶律、大
 寶令ト稱ス、元正天皇養老二年律十卷十二篇
 令十卷三十篇ト爲ス）此ニ至リテ刑法大ニ備ハリタリ、曰ク、若罪ハ（十ヨリ五
 十マテ）杖罪ハ（六十ヨリ
 百マテ）徒
 罪ハ（一年ヨリ
 三年マテ）トシテ各五等ニ分チ、流罪ハ近中遠ノ三等トシ、死罪ハ絞斬ノ二
 等トス、以上通ジテ五罪廿等デア（ル、其他八虐ト稱シテ、謀反、大逆、謀叛、惡逆、不
 道、大不敬、不孝、不義ノ罪ヲ犯ス者ハ常赦ニモ原サズ應議ニモ減ゼズ、以テ君
 臣父子ノ分ヲ嚴守セシメラレタ、此八虐ノコトハ唐六典刑部ニ云ク、乃立十
 惡以懲、叛逆、禁淫亂、沮不孝、威不道、其一曰謀反、乃十曰內亂、此十者常赦之

所_レ不_レ原止ト、此十惡ノ中、不睦、内亂ノ二條ヲ除キテ八トセシユヘ、續日本紀考證_八ニハ、十惡案大寶定律令十惡改爲八虐ト云ヒ、又唐律御調ニハ享保十年已十二月获生惣七ニ訂正寫點被仰付候節差出候、書付十惡之内、和律ニハ不睦内亂ノ二條ヲ除キ、有之候、是ハ朝廷ニ憚リ候所多ク御座候ニヨリテ内亂ノ律ヲ除キ、其相伴ニ不睦ヲモ除クト相見ヘ申候、但隋大業年中十惡ノ内二條ヲ除キ、八惡ニ致候先例ヲ用井申候事ニ御座候トアリ、

而シテ八虐ノ罪質ハ律書ノ註ニ曰ク、國家ノ危キヲ謀ルヲ謀反ト謂フ、山陵及宮闕ヲ毀ツコトヲ謀ルヲ謀大逆ト謂フ、國ニ背キ僞ニ從フ事ヲ謀ルヲ謀叛ト謂フ、祖父母、父母ヲ毆及謀殺シ伯叔父、姑、兄、姉、外祖、父母、夫、夫父母ヲ殺スヲ惡逆ト謂フ、一家死罪ニ非ズシテ三人ヲ殺スヲ不道ト謂フ、大社及大祀神御之物乘輿服御物ヲ毀ツヲ大不敬ト謂フ、祖父母父母ヲ告言詛罣スルヲ不孝ト謂フ、本主本國守見タリ業ヲ受クル師ヲ殺スヲ不義ト謂フ、トアリ、賊盜律云謀反大逆者皆斬、謀大逆者絞、謀叛者絞、惡逆不道者殺訖レハ斬、又ハ絞、

大不敬ニシテ神璽ヲ盜ム者、又ハ僞造者ハ斬、其他ハ徒刑トス、猶不孝及不義モ犯狀ニ依リ、斬絞又ハ徒刑ニ處スルコト金玉掌中抄及律疏ニモ詳カニ出テアル之ヲ參照スベシ、聖武天皇神龜二年ニハ詔シテ死者復活スベカラザルヲ恤マセ給ヒ、死罪ヲ流罪ニ、流罪ヲ徒罪ニ爲シ、大辟ノ罪モ大抵流罪ニ處セラレ、大赦、常赦、曲赦等ノ詔モ屢下シ給ヒシニ由リ、寬典ノ流弊ヲ生ジタリト雖モ、車駕京中ヲ巡幸シ給ヒシニ、偶々獄舍ノ前庭ニ於テ、囚徒ノ悲吟號叫スルヲ聞シ召シ、痛ク大御心ヲ惱マセラレタルコトアリト記シテアレバ、悲慘ノ一斑ヲモ想像シ得ラル、コトデアアル(大赦、常赦、曲赦ハ現今ノ大赦特赦、減刑、假出等ニ符合スルカ)光仁天皇寶龜以後ハ、刑法稍峻嚴ニシテ、放火盜賊ヲバ衆中格殺スルニ至リタ、是即チ從來ノ死罪、斬絞ノ外ニ、新ニ格殺ノ刑ヲ增加サレタノデアアル、而シテ花山天皇ノ寬和中ニ至リテ、梟首ノ刑ヲ增加サレタレドモ、朝政稍弛ミ、武人跳梁盜賊横行シ、朝權遂ニ武門ニ歸ス、爾來六百有餘年、後水尾天皇ノ朝ニ至ル間ハ、行刑ノコトモ亦大ニ紊亂シ、新設變更殆ド常ナク、史上又確實ニ徵ス

ベキモノナシト雖モ、堀川天皇ノ朝ニ北條氏ガ源氏ニ代ツテ政權ヲ握ルニ至リテ、貞永式目又ハ御成敗式目ト云フモノガ出來テ、コレガ鎌倉、室町、江戸ノ三幕府ニ通ジテ基本的法制トナツテ居リタ、蓋シ此法制ノ大要ハ以下中古刑法ノ所ニ於テ記述スルニ依リ此ニ之ヲ省ク、

第二節 支那ノ刑法一斑

古代ニ於ケル支那ノ刑法トシテハ、舜典、呂刑、秋官等アリテ、唐虞三代ノ時ヨリ既ニ刑典ノ繁然トシテ備ハルアリ、舜ハ四凶ヲ罰スルニ當リテ、鯀ヲ羽山ニ殛シ、桀紂ハ炮烙ノ虐刑ヲ行ヒ、戰國ノ世ニハ湯鑊ノ刑ヲ用フ、又太古水草ヲ沙原ニ逐テ轉々漂泊セシ所ノ「イスライル」人モ十章ノ禁令ヲ有シタノデア、而シテ呂刑ノ如キハ、書經卷六苗民弗用靈制以五刑、惟作五虐刑、曰「法殺無辜、爰始淫爲劓、刵、椽、黥」等トアリテ、周以前ノ五刑ト稱スル墨、劓、剕、宮、大辟、モ、凡テ皆死刑又ハ肉刑ニ非ザルハナシ、其他、刵、朴、髡、鉗、梏、桎、流、贖刑ト稱

スルモノハ、何レモ唐虞ヨリ三代ノ末ニ至ル迄行ハレシ所ノ刑ノ種類ニシテ、象以典刑、流宥五刑、鞭作官刑、朴作教刑、金作贖刑、青、災、肆赦、怙終、賊刑、欽哉、欽哉、惟刑之恤哉、書經卷一ト云ツテアレドモ、唐虞ノ代ノ三苗ノ主ノ如キハ最モ慘酷ナル刑ヲ作テ民ヲ苦シメタモノデア、ルコトハ尙書呂刑ノ記事ニテ明ラカデア、ル猶、（學源通鑑鈔十一卷、類案三代格十二卷類案）等參照シテ可ナルベシ、（名義抄、百練抄、玉海、漢書廿三卷刑法志）

第三節 泰西ノ刑法一斑

羅馬民族ノ間ニ行ハレシ所ノ刑法ハ、原始復讐的主義ニシテ、被害者及其親族ニ於テ刑罰ノ權ヲ掌握シテ居リタノデア、ル、而シテ其被害者ナル者ガ一人タルノ場合ニ於テハ私約ノ體裁ヲ以テ、加害者ヲシテ其犯罪ヨリ生ズル所ノ損害ヲ賠償セジメ、若シ果サバ、爾時ハ此ニ始メテ公力ヲ要請シ、其損害賠償ノ額ハ被害者ノ身分ニ從ツテ著ルシク等差ガアリタ、而シテ賠償ノ資力ナキ者ハ則チ之レヲ拘置シテ奴僕ト爲シ、其生殺ノ權ハ主人ノ手裡

ニ歸セシメ、若シ被害者ガ社會公共ナル場合ニ在ツテハ直ニ公力ヲ以テ加害者ニ對シ、或ハ其生命ヲ絶チ、或ハ其身體ヲ殘害若クハ追逐ス、是即チ羅馬民族ニ於ケル刑ノ種類モ、死刑收贖、追放、肉刑等ノ範圍ヲ出デザリシコト史上歷々トシテ隱スベカラザル所ニシテ、其他英、佛、獨ノ各國モ皆然ラザルハナシ、就中英國ニ於テハ、千五百七十年乃至千五百九十七年ノ法律ニ依ルニ、浮浪者ヲ罰スルニ笞杖ハ肉ヲ破リ血ヲ流ス、又ハ切耳絞首等ヲ以テシ、又顯理第八世ノ治下ニ於テハ、犯罪者ヲ誅戮スルモノ其數實ニ七萬二千有餘ノ多キニ及ビ、獨逸ニ於テモ初犯ハ國境外ニ追逐シ、再犯以上ハ或ハ之ヲ曝市シ、或ハ之ヲ笞杖シ、重キハ之レヲ絞殺シタノデアアルカラ、其他ノ國モ推シテ知ルベキデアアル、

第四節 各國ニ於ケル監獄ノ一斑

以上古代ニ於ケル各國ノ刑法斯ノ如シ、故ニ監獄モ當時ニ在リテハ威嚇

ヲ過重シ、又ハ一時ノ結局ヲツケル爲ノ機關ニシテ、其多クハ地ヲ割シテ獄ト爲ス、其目的ノ單純ナルニ由リ、其組織構造モ極メテ粗笨ニシテ、且ツ荒廢シテ居リタノデアアル、依テ監獄ノ用語モ、羅旬語ニテ「カルセル」瑞典語ニテ「ヘクタ」獨逸語ニテ「ケルケル」又ハ「ゲフエングニス」ト稱シ、何レモ人畜ヲ捕擒若クハ繋留スルノ文辭ヨリ轉化シ來リタモノデアアル、又東洋ニテハ多クハ牢屋ト稱ス、其牢屋ノ字義ハ閑養犬馬ノ圈也トアリテ、東西兩洋其轍ヲ同フシ、或ハ荒倉敗艦、或ハ土窖、獸檻ノ類ヲ監獄ニ充テ、別ニ一定ノ建物アルニアラザリシナリ「エベルチ」氏著「監獄沿革史」ニ記スル所ノ印度、埃及、又ハ希臘羅馬等ニ於ケル古代監獄ノ實況ヲ讀ミ來レバ、實ニ人ヲシテ慄然タラシム「セルピウス」トリウス王「獄ヲ羅馬ニ建テ、國安ヲ維持スルガ爲ニ、王命ニ背ク所ノ者ヲ捕ヘテ此ニ監禁シ、或ハ有疑者ヲ拘留シ、或ハ一私人ノ債權者ヲシテ債務者ヲ繋留スル場所トス、其構造ハ地ヲ堀ルコト深サ十二尺、光線入ルコトナク、空氣モ亦通ゼズ、異臭鼻ヲ撞キ、沍寒堪ヘズ、飲食飢渴ヲ凌グニ足

ラズ、王、ユウグルタ、及び名將、レンタルス、ハ、即チ此獄ノ犠牲トナリテ終ニ其
身ヲ畢ハルニ至リタ、當時羅馬ニ於ケル獄吏ノ株ハ實ニ巨萬ノ額ヲ以テ賣
買セリト云フ、其實況ノ如何ニ殘酷ニシテ、又之レヲ追レンガ爲ニ如何ニ厚
ク獄吏ニ贈賄セシヤヲ知ルベキデアアル

第五節 概論

古代ノ刑法及監獄ノ状態ハ、上來ノ記述ニテ粗ボ其一斑ヲ知ルニ足ルベ
シ、然レバ教誨感化ノ之レニ伴ハザルヤ敢テ疑フベキニアラズ、抑々古代一
般ノ法想トシテハ、現今ノ如ク未ダ曾テ社會モ亦犯罪ニ責務ヲ有ストノ觀
念ナク、社會ヲ害シ、國政ヲ犯ス罪人ハ、即チ是レ社會ノ讎敵デアアルカラ、之レ
ヲ誅戮スルニハ諸有方法手段ヲ以テセザルベカラズ、是ヲ以テ一度罪ニ決
スル所ノ者ハ其生命身體及財産ヲ舉テ盡ク之レヲ國權ガ刑罰ノ目的ヲ達
スル爲メ犠牲ニ供シ、其間ニ於テ毫モ個人的ノ權利及社會諸般ノ事情ヲ顧

慮斟酌スル所ハナカリタノデアアル、故ニ死刑、肉刑、追放、加辱、罰金、奴役等、ハ當
時ニ於ケル刑罰ノ種類ニシテ、教誨感化ノ如キ、仁愛的施設ノ之ニ伴ハザリ
シハ、東西殆ド其軌ヲ同フスルモノハ、如シ、然レドモ我國ニ於テハ、神武天
皇即位ノ元年、罪名若干條ヲ定メ、罪ノ輕重ニ從ヒ贖物ヲ徵シ、其レヲシテ神
明ニ誓ツテ拔除シ、惡ヲ去リ善ニ遷ラシメ、若シ其元惡大愆始終悛ムルナキ
者ハ、物部氏ニ命ジテ之レヲ戮セシメ給ヒタトアレバ、此ニ既ニ懲戒感化相
伴ヒ、以テ民ヲシテ改惡歸善セシメ給フ所ノ法制ノ基本ヲ樹テサセ給ヒタ
コトハ、明ヲカデアアル、然レドモ其後時代ノ變遷トハ謂ヒ、殊ニ中世武家制法
時代ニ至リテハ、漸次刑法モ殘酷ニ偏シ、犯罪者ヲ視ルコト仇敵ノ如ク、隨テ
仁愛的感化主義ノ觀念ハ其影ダニモ見ルコト能ハザルニ至レリ、然ニ明治
革新以後歐羅巴ニ於ケル改良法制ノ我國ニ輸入セラル、ト雖モ、其本源ヲ釋ス
ノ必要ヲ自覺シタル結果、從來ノ虐刑ヲ改正セラル、ト雖モ、其本源ヲ釋ス
レバ、一視同仁ノ聖旨ヨリ出デタルモノニシテ、俄ニ歐米ノ法制ノミヲ模倣

シタルニハ非ズ語ヲ換ヘテ云ヘバ畏クモ明治天皇ハ國祖傳持ノ感化主義ヲ復興シ給ヒタル所ナリ依テ明治二年ニハ孝徳天皇ノ法制ヲ襲ガセ給ヒテ刑部省中ニ囚獄司ヲ設ケラレ専ラ優恤ヲ旨トシ從來ノ陋弊ヲ剷除スルコトニ務メシメラレタ依テ同年十二月新律綱領ヲ發布シ給ヒ囚徒役使ノ餘暇ヲ以テ文ヲ學ビ人倫五常ノ道ヲ篤ク心得シムルノ緊要ナルコトヲ示サセラレ同五年ニ發布セラレタ監獄則ノ開卷ニハ獄トハ何ゾヤ罪人ヲ禁鎖シテ之レヲ懲戒スル所以ナリ獄ハ人ヲ仁愛スル所以ニシテ人ヲ殘虐スルモノニアラズ人ヲ懲戒スル所以ニシテ人ヲ痛苦スルモノニアラズ刑ヲ用フルハ己ムヲ得ザルニ出ヅ國ノ爲ニ害ヲ除ク所以ナリ獄司欽テ此意ヲ體シ罪囚ヲ遇スベシト此ニ於テ我國監獄ニ於テ宗教的佛教誨感化ノ必要ヲ生ズルニ至レリ若シ神武天皇ノ朝ニ佛教開宗シ居ラバ誓神拔除ト俱ニ教誨感化ニ盡シ以テ去惡遷善ノ聖旨ニ奉答スル所アリタルナラント思料セラル、ナリ、

第二章 中古ニ於ケル各國ノ行刑

第一節 日本ノ刑法一斑

我國ニ於ケル中古ノ刑法ハ成文法第二期武家制法時代ニ屬スト雖モ鎌倉室町ノ幕政ハ之レヲ上ノ古代ノ章ニ略攝シ中古ノ刑法トシテハ江戸幕政ヲ以テ論述セント欲ス抑江戸幕政トハ慶長八年 徳川家康將軍ニ任ゼラル、ニ及ンデ刑ヲ更メテ死罪ヲ斬、火、獄門、磔、鋸挽ノ五等トシ遠島ハ流刑ニシテ伊豆七島、薩摩五島、肥前天草、隱岐、壹岐等ニ便宜放逐シ無籍者ニテ再犯ノ虞アル者ハ佐渡又ハ佃島等ニ放逐苦使セシメタルノデアル、其他追放ハ所拂、江戸拂(十里四方)又ハ輕追放、中追放、重追放ノ別アリタルモノナリ、又敵ト云フテ輕キハ五十、重キハ一百ノ二等ニ分チタルノデアル、以上四種ノ外ニ屬罪即チ附加刑トシテ晒、入墨、缺所、非人、下手ノ四種ガアリタ、其他士人ノ閏刑ニハ逼塞、閉門、蟄居、改易、切腹等ノ區別アリ、又僧徒ニハ晒、追院、搆ノ三種ヲ以

テシ、婦女ニハ剃髮及奴ノ別アリ、庶人ニハ呵責過料、戸閉、手鎖等ノ區別ガアリタノデアアル。

第二節 泰西ノ刑法一斑

中古ニ至リ羅馬帝政ノ勢力漸ク擴張シ、法制ノ發達進歩ニ從ヒ、古代民族ノ間ニ行ハレシ所ノ復讐的刑罰ノ私權ハ全ク消亡シテ國家ニ移リ、其主義モ亦一變シテ威嚇ヲ以テ根據ト爲シ、爾後相承襲シテ羅馬系統ニ屬スル歐洲各國ノ刑法ソ基礎ヲ爲スニ至レリ、然レドモ刑ノ種類及其執行法等ニ就テハ古代復讐主義タリシ「トリヤヌム」ニ比シ、或ハ一層ノ甚ダシキヲ加ヘタルモノ、如シ「クローネ」氏云ク中世ニ於ケル監獄ノ慘ハ磔刑ノ慘ヨリモ慘ナリ」ト、是レ刑罰ノ威嚇主義ニ基キタルガ故デアアル。

第三節 刑法ノ主義改良ノ動機

泰西ニ於ケル、刑法ノ主義改良ノ動機ハ大約以下ノ三由トスベシ、一、改良スベキ必要ノ時機ニ迫リタルニ由ル、二、道義的觀念ノ發達ニ由ル、三、經濟的思想ノ進歩ニ由ル、
第一、改良スベキ必要ノ時機ニ迫リタルニ由ルトハ、古代ニ於ケル復讐的刑罰主義ガ、中古ニ至リテ威嚇主義ヲ採ルト雖モ、單ニ威嚇ヲ目的トスルニ止リテ、犯人ノ生命若クハ身體ヲ殘害スルコト反テ酷虐暴戾ニ失シ、加之ズ當時恰モ十字軍ノ兵亂ニ際會シ、漂泊浮浪ノ徒到ル所ニ出沒シ、漂竊跳梁ノ害ヲ逞フスルモノ其數舉テ算スベカラズ、之レニ對シ始メハ嚴刑酷罰ヲ加ヘテ之レヲ驅逐セシモ、從テ制スレバ從テ起リ終ニハ絞臺ニ用フル材木及捕繩ニ供スル麻苧ニモ缺乏ヲ告ゲ、復以テ盛ニ死刑及肉刑ヲ用フルニ由ナカラシムルニ至リタ、是レヲ第一ノ理由トス、
第二、道義的觀念ノ發達トハ、犯人其モノヲ唯ニ誅戮コレ事トスルハ世道ノ旨趣ニアラズ、宜シク懲戒感化シテ社會有用ノ良民ニ復歸セシムベシト謂フ、是ヲ第二ノ理由トス、
第三、經濟的思想ノ進歩トハ、犯人其モノヲ漫ニ絶

滅セシメテハ國利ヲ増進セシムルコトヲ得ザルベシ故ニ犯人ハ寧ロ自由剝奪ノ下ニ於テ社會公益ノ爲ニ使役スルニ若カズト謂フ是ヲ第三ノ理由トス

以上ノ理由ヲ以テ改良ヲ主張セシハ當時ノ宗教家及學者ニシテ遂ニ現行ノ自由刑ニ改メ懲戒感化主義ヲ採用スルニ至タノデアアル蓋シ古代ニ於テモ古哲「プラト」ノ如キ東洋ノ古聖賢ノ如キ何レモ道義的思想ヲ刑事上ニ表現シタルモノ少ナカラズ又經濟思想トシテモ社會公益ノ爲ニ犯人ヲ使役セシコトハ我國ニ於テハ既ニ履仲天皇即位元年ニ罪ノ從犯タル者ヲ使役ニ供セラレ支那ニ於テモ周以前ニ在リテ夙ニ罪囚ヲ監門監宮等ニ使役シ又唐朝以後ニ在リテハ徒刑囚ヲ鐵冶ニ使役スルノ規定アリ泰西ニ於テモ埃及希臘羅馬ハ罪囚ヲ探礦ノ業ニ使役シ佛蘭西ニルベルヒ、ゲスア等ニ於テハ舟夫トシテ船艦ニ役シ又ハ街路改修ノ勞役ニ從事セシメタルモノナリ然レドモ時代ノ變遷ト俱ニ中古却リテ之レヲ中絶シタルモノ、如

シ依テ之レヲ歴史ニ徵スレバ茲ニ古代聖賢ノ思想ノ復興ヲ見ルニ至リタモノト謂フモ過言ナラザルベシト信ズ

第四節 各國ニ於ケル監獄ノ一斑

中古ニ於テハ東西各國何レモ一定ノ獄舎ヲ建設スルニ至リタルモノナリ我國ニ於テモ慶長八年徳川家康將軍ニ任ゼラル、ニ及ンデ獄舎ヲ江戸常盤橋門外ノ水濱ニ設ク其後靈元天皇ノ延寶年間ニ之レヲ小傳馬町ニ移シ其獄舎ヲ五種ニ分ケラレタリ其五種トハ曰ク揚座敷コレハ將軍ニ謁見スル者ニテ犯罪スレバ此ニ拘禁ス曰ク揚屋コレハ士人及僧侶ニシテ犯罪シタル者ヲ拘禁ス曰ク大牢曰ク百姓牢コノ二個ハ共ニ平民ノ犯罪者ヲ拘禁ス曰ク女牢コレハ婦女ノ犯罪者ヲ拘禁スル所トス而シテ石出帶刀ナル者ヲシテ世々監守(今ノ典獄ニ當ル)ノ職ヲ司ラシメ之レニ同心(看守ニ當ル)獄丁(押丁ニ當ル)數名ヲ隸屬セシメ又囚獄ノ病監二箇所ヲ置ク一ヲ淺草千束村ニ一ヲ品川驛

ニ置キ、前者ハ善七郎、後者ハ松右衛門ナル者ヲシテ共ニ世々之レヲ守ラシム、(以上二人ヲ職多頭ト稱ス)享保七年本所松坂町ニ獄舎ヲ設ケテ代官ノ管轄スル部民ノ犯罪者ヲ拘禁スル所トシ、馬喰町代官所ノ管轄ニ屬セシメ、(代官ハ當時ノ地方長官ニシテ江戸近地ヲ支配ス)其隸屬スル所ノ手附(同心ノ如キ役人ナリ)ヲシテ看守セシメタノデアアル、其他京都、大坂、長崎、奈良ノ如キ奉行若クハ代官ノ治スル所ハ皆囚獄アリ、又各大小ノ藩ニ於テモ概ネ小傳馬町ノ獄制ニ準ジテ法ヲ建テ、令ヲ行ヒタノデアアル、又裁判制度トシテハ、江戸ニハ裁判所ガ三個アリテ、一ハ勘定奉行ト云ツテ旗下其他身分重キ犯罪者ヲ裁判スル所トシ、一ハ寺社奉行ト云ツテ大僧正以下身分アル僧侶及位記ヲ有スル神官以下ノ神事ニ關スル犯罪者ヲ審理決定シ、一ハ町奉行ト云ツテ通常ノ犯罪者ヲ處刑スル所ニシテ之レヲ南北ノ二ヶ所ニ置キ、即チ吳服橋内ニアルヲ北ト云ヒ、數寄屋橋内ニアルヲ南ト云ヒ、月番ヲ以テ囚獄ヲ監督シ、毎月交代ノ際吟味ニ至ラザル囚人アル時ハ其事由ヲ附シ、老中ヲ經由シテ將軍ノ閱覽ニ供スルノ規定ナリシ、然レドモ後ニ至

リテハ之レヲ略シテ老中限リ視ルコト、ナリシ、當時斯ノ如ク鄭重ニ扱ハレシコトハ、畏クモ曩ニ清寧天皇ハ親シク囚徒ヲ録シ給ヒシコトアリシニ由ル、天皇既ニ然リ況ンヤ將軍ニ於テヲヤ宜シク親カラ審査シテ罪アル者ハ速ニ斷ゼシメ、若シ故ナクシテ長ク滯獄セシムルガ如キ事アレバ之ヲ嚴重ニ督責セシ所以ニシテ、其人權ヲ重ンジタルコトハ、洵ニ美事ト謂ツベシ、寛政二年徳川十代將軍家治ノ時ニ及ンデ、石川大隅守屋敷裏ノ霞沼一萬六千坪餘ノ所ニ拘禁所ヲ建設シ、之レヲ人足寄場ト稱ス、而シテ市井ニ徘徊スル無頼無宿ノ徒ヲ驅リテ此ニ拘禁セリ、是レ現今巢鴨監獄ノ前身デアアル、而シテ當時囚獄ノ監督ハ、與力同心ヲ特ニ巡檢セシメ、尙町奉行ハ毎月一回宛日ヲ定メテ巡閱シ、或ハ目付役、徒目役、小人目付等ヲシテ不時臨檢セシムル事ニナリテアリタ、其目付役人トハ現今ノ檢察官ニシテ(勘定、寺社、町)ノ三奉行ハ裁判官ニ當ル、是レ洵ニ管理監督ノ方法トシテハ頗ル精密周到ナリト謂フベシ、然レドモ其内容ノ事實ハ慘怛無狀ニシテ云フニ忍ビザルモノアリ、殊

ニ幕政ノ末葉ニ至リテハ諸般ノ弊害相生シ所謂ル地獄ノ沙汰モ金次第ト云フ言ヲ發セシメ、又武斷的政弊トシテハ、人權ノ何タルヲ辨ヘズ、切捨御免杯ト稱シテ、良民ノ生命スラ何時斬殺セラル、ヤモ計リ難キ程ナレバ、囚人ノ生命ハ如何ニ危殆ナリシヤハ推知シ得ラル、コデアル、英國ニ在リテハ、千五百五十年、首都倫敦ニ懲役監ヲ建設シ、浮浪者、賣淫婦及遊惰者ヲ集禁シ「ニルベルヒ」ニ在リテハ、千五百八十八年、病院ヲ改造シテ懲治監ト爲シ、此ニ乞食ノ幼者及遊惰ノ婦女ヲ拘禁セリ、是即チ現今ノ自由刑執行ノ場所タル監獄ト略ボ其性質ヲ同フスルモノニシテ、刑ノ目的トシテモ此ニ始メテ新タラシキ矯正感化ノ一ヲ加フルニ至リ、斯克一定ノ監獄建設ヲ見ルコトニナリタ、其後幾何モナクシテ「アムステルダン」「リウベック」「ハンブルグ」ニ相續テ懲役監ヲ創設ス、是レ皆恒産ナキ遊民ヲ懲治矯正シテ終ニ以テ秩序アル良民的生活ニ復歸セシメント云フ原則ニ基テ組織シタモノデアアル、然レドモ不完全ナル規則ノ下ニ之ヲ管理セシメ、或ハ暴君汚吏ノ誤用スル所

トナリ、其己レニ便ナラザル者ヲ理由ナク捕禁スル場所ニ供セシコト其例乏シカラズ、又「ホフルド」氏ノ報告書ニ徵スレバ當時監房ノ多クハ其位置地層ノ下ニ在リテ、房室ハ狹クシテ低ク空氣ノ流通極メテ悪シク、光線ノ射入モ不充分ニシテ、濕氣ハ常ニ室内ニ滿チ、甚ダシキハ水ヲ以テ床ヲ覆フモノアリ、又給與スル所ノモノハ些少ノ麵糰ト水アルノミ、偶々祭日ニ肉ト粗製ノ麥酒ヲ給與スルモノ僅ニ二三監獄アリト雖モ、蓋シ斯ル給與ハ慈惠家ノ義捐ヲ仰グニ由ル、又臥具ヲ給スルコトハ甚ダ稀レニシテ、偶々之レアルモ半ハ既ニ腐朽シテ其用ヲ爲サズ、又未決囚ト既決囚ヲ雜居セシメ、或ハ男女ノ區別モ嚴格ナラズ、殊ニ民事囚ノ如キハ獨リ其妻子ノミナラズ、時トシテハ曖昧的婦女ノ携帶ヲ許シ「キングスベンチ」ノ如キハ在監囚三百九十五人ニ對シ、其妻子ノ數ハ六百人ノ多キニ至リタ事例モアル、斯ノ如ク不規律ニシテ酷遇ナルガ故ニ、此ニ拘禁セラル、所ノ者ハ如何ゾ其健康ヲ保全センヤ、氣息奄々トシテ僅ニ露命ヲ保ツモノ比々皆然リ、加之ズ其内部ニ於テハ

種々ノ弊害ヲ生ジ、即チ獄吏ニ贈賄スル者ハ優遇ヲ得ルコト亦難カラズ、苟クモ金ヲ投ズレバ求メテ得ザルモノナク、甚ダシキハ長夜ノ宴ヲ張リテ歌舞管絃ノ快ヲ極ムルコト亦敢テ異ト爲スニ足ラズ、金力ノアル所、暴威之レニ加ハリ、罪囚モ金力ニ依テ強大ナル權勢ヲ有シテ、眼中ニ獄則ナク、又獄吏ナシ、自由ニ自カラ獄則ヲ設ケテ自由ニ之レヲ執行シタノデアアル、而シテ獄吏ノ職トスル所ハ、每朝死屍ヲ取片ツケ、若クハ罪囚ノ内意ヲ啣テ獄外ニ使スルガ如キニ止マリシト云フ、又佛蘭西ニ在リテハ「パスチル」又ハ「王城内ノ監獄」ハ（時ノ主權者ガ已レニ領ナラザル愛國ノ志士ヲ拘禁ス）姑ク措キ、其他普通ノ監獄ハ一般ニ監房狹隘ニシテ不潔甚ダシク、構造モ極メテ脆ク、逃走亦頻繁ニシテ、或ハ全監ヲ空虚ナラシメタルコト再三ニ止マラズ、而シテ給與足ラズ、規律立タズ、富者ハ寬待セラレ、貧者ハ死苦ニ勝ルノ酷遇ヲ受ク、殊ニ舟夫刑ヲ受ケテ船中ニ苦役スル者ハ、悲惨實ニ言語ニ絶ヘ、小過アレバ痛ク之レヲ鞭撻シ、再ビスレバ斧鉞忽チ其頭上ニ來ル、死屍累々トシテ之レガ爲ニ海底ヲ淺カラシメタリト云フ、

又普國ニ在リテモ時ノ司法大臣「フアンアルニーム」氏ノ調査報告シタル所ニ據ルニ監獄ノ多クハ孤兒院、病院、癲狂院等ト接續シテ建設セラレ、一房内ニ異種多數ノ罪囚ヲ雜居セシメタルデアアル、又構造モ不完全ニテ逃走亦頻々、獄吏ノ常務ハ逃走ノ事項ニ在リタルガ如シ、又獄吏ノ人員モ少ナク性格モ汚卑賤劣ヲ極メ、甚ダシキハ目ニ一丁字ナキ走卒僮僕ノ輩ヲ以テ之レニ任ズル如キモノアリテ、俸給モ極メテ薄ク、一人ノ糊口スラ完全ナル能ハズ、故ニ上長官ヨリ下門衛使丁ニ至ル迄何レモ皆賤劣ナル内職ヲ營ムカ、然ラザレバ公然在監人又ハ其親族ヨリ收賄セザルハナシ、或ハ在監人ノ食料其他一切給與品ノ受負業ヲ營ミ以テ暴利ヲ占ル者少ナカラズ、洵ニ弊害百出シ、其間一ノ官紀アルヲ見ズ、又獄内ニ於テハ出產、墮胎、生兒、撲殺等ノ多カリシ事實ヲ以テ之レヲ推セバ、當時在監男女ガ交通媒合スルノイカニ自在ナリシカヲ想像スベキデアアル、其他埃國、伊國、西國、露國等モ英佛ト同ジクシテ、其慘狀ハ相撰ブ所アラザリシモノ、如シ、獨リ和蘭共和國ニ在リテハ、社會

モ亦犯罪ニ對シテ幾分ノ責務ヲ有スルモノトシ行刑ノ事ハ嘗ニ犯人其者
ノミヲ誅戮スベキモノニアラズ反テ之レヲ矯正感化シテ社會有用ノ良民
ニ復歸セシムルヲ要ストノ眞理ヲ刑事上ノ實際ニ應用シテ從テ監獄モ亦此
旨趣ニ依テ大ニ釐革改良スル所アリタリ故ニ監獄ハ當時既ニ清潔規律勤
勉等ノ諸要件ヲ具ヘ世人ヲシテ冥々タル陰雨ノ暗夜ニ倬然一點ノ星光ヲ
望ムノ觀アラシメタノデアアル而シテ此和蘭ノ監獄ニ照準シテ新ニ一ノ監
獄ヲ創設シタルハ白耳義國デアアル即子爵ウイライン第十九世ノ設計ニシ
テ千七百七十二年「セント」府ニ工ヲ起シ同七十五年ニ竣工シタノデアアル類
別拘禁ノ法ハ其宜シキニ適ヒ遇囚諸般ノ事モ模範トスルニ足ル其効果ノ
顯ハルト共ニ一般ノ國民ヲシテ漸次ニ死刑體刑等ノ慘ヲ廢シ成ルベク
多ク且廣ク自由刑ヲ以テ之レニ代ハラシムベシトノ希望ヲ惹起セシメ終
ニ監獄改良事業ハ踵々トシテ此ニ其曙光ヲ發セントスルノ機運ヲ見ルニ
至リタノデアアル

第五節 監獄改良ノ發展

上ニ既ニ述ルガ如ク中古ニ至リテハ道義及經濟ノ思想漸次發展シ各國
共ニ一定ノ監獄ヲ創設スルト同時ニ囚徒ニ業務ヲ授クルニ至リシコトハ
詢ニ美事ナリト云フヲ得ベシト雖モ行刑ノ内容ハ威嚇ヲ目的トシテ囚徒
ヲ虐遇シ衛生ナク教誨ナク紀律ナク加之ズ當局ノ吏員ハ無智ヲ以テ充タ
シ之レヲ遇スルコトモ極メテ冷カニシテ之レガ爲ニ弊害續出シタルコト
ハ東西其軌ヲ一ニシテ當時ノ爲政家タルモノモ其慘況ハ知ラザルニハア
ラザルベシ然レドモ進ンデ能ク之レガ改良ニ着手セザリシ所以ノモノハ
大約左ノ事情アリタルニ由ルベシ

一、當時一般ノ風潮ハ上下尊卑ノ懸隔甚ダシク治者即チ社會ノ上流ニ立
ツ所ノ者ハ被治者タル下層黎民ヲ矜レムノ情甚ダ薄ク從テ監獄ハ下
層民衆ノ出入スル場所ナルガ故ニ勢ヒ之レガ利害ヲ等閑ニ附スルニ

傾キタルニ由ル、

三〇

一、政教混淆ノ弊ハ痛ク人權保護ニ關スル事項ヲバ輕蔑視スル傾嚮アリ
シ結果ニ由ル

然ニ時勢ハ此ニ一變シ、自由平等ノ哲理ハ、到ル所、社會ノ革命的動搖トナリ
テ其實行ヲ顯明シ、上下尊卑ノ階級ハ次第ニ之レヲ打破シ了ラントスルニ
至リタ、又學理ノ變遷トシテハ殊ニ法制ノ學術家グロツシウス「ホツベス」ト
マシウス「ウヲルテイア」ベツカリヤ「モンテスキュー」諸氏ノ研究ニ由リテ、益
々進歩發展シタル結果ハ、此ニ始メテ政教混淆ヲ分離シ、刑理ト教理ノ間ニ
判然タル境界ヲ劃立シテ、即チ刑法ナルモノハ人爲的及國家的基礎ノ上ニ
創制シテ、彼ノ人權ヲ無視スル所ノ凡テノ殘虐無道ノ分子ハ悉ク刑罰ノ範
圍ヨリ排除スル機運ニ際會シタノデアアル、加之ズ宗教革命ハ、十七世紀ノ中
葉ニ起リ、爾來連續シテ各國ハ其影響ヲ受ケ、宗教的博愛慈善事業ノ助成ス
ルモノアリテ、即チ千七百七十六年及同七年ノ創立ニ係ル、費拉捏費亞監獄

改良ノ如キハ熱心ナル「クエーケル」宗徒ノ發意ニ出デタルモノニシテ、監獄
改良事業ハ此ニ始メテ旭日天ニ朝スルノ勢ヲ見ルニ及ンダ、而シテ猶特筆
スベキハ、英國ノ博愛家「ジョン・ホワルド」氏デアアル、氏ハ千七百二十六年龍動
商賈ノ家ニ生レ、千七百九十年「ヘルソーン」ニ瞑目スル迄殆ド六十餘年間終
始一日ノ如ク、舉身盡資監獄改良ニ刻苦シ、歐亞ノ足跡五回ニ及ビ、危害其身
ニ迫ルコト前後幾十回ナルヲ知ラズ、然レドモ入りテハ潜心著述ヲ事トシ、
或ハ窮民ヲ賑恤シ出テハ鐵窓ノ下ニ起臥シテ監獄内部ノ慘況ヲ探リ、或ハ
帝王ニ説テ之レガ改良ニ努メ、私財ヲ蕩盡スルコト前後通計三萬バウンド
スタルリング「ノ多キニ達シ、經廻ノ足跡ハ實ニ四萬二千英里ヲ過グト云フ、
而シテ六十有餘ノ高齡ニ及ビタルモ、此ニ復六回ノ監獄視察ノ遠征ヲ企テ
東洋ニ遍歴シ、博ク監獄改良ノ材料ヲ蒐集セント欲シテ露國ヲ經テ「ヘルソ
ーン」ニ至リ、劇勞ノ餘熱病ニ侵サレ遂ニ起ツ能ハザルニ至リタ、斯ノ如キ氏
ノ熱心ハ如何ニ歐洲各國ノ帝王ヲ始、學者、政治家ノ心ヲ動シタルカ、如何ニ

英國議員ヲシテ監獄改良ノ必要ヲ感ゼシメタルカ、如何ニ監獄一般ニ於ケル内部ノ慘況ヲ暴露セシムルニ至リタルカ、實ニ氏ガ劉切ナル考案ハ監獄改良ノ上ニ顯著ナル効果ヲ奏セシメタルデアアル、而シテ氏ノ改良法案ハ分房制ニアリ、此制度ハ時ノ皇帝、ゲラルド三世ノ嘉納スル所トナリ、議會モ亦此法案ヲ可決シタノガ、千七百七十九年デアアル、然ニ時機未ダ熟セザルニヤ、建築地撰定等ニ關シ十分其實行ヲ見ルニ及バズシテ止ムニ至レリ、若シ英國ヲシテ當時速ニ氏ノ法案ヲ實行スルニ至ラシメナバ、分房制監獄ノ率先者タル名譽ハ英國ノ占有スル所トナリシナラン、然ニ此名譽ハ終ニ後進者タル米國ノ博取スル所トナレリ、以下其概況ヲ記述スベシ、

抑米國ニ在テハ、既ニ十八世紀ノ中葉ヨリ「ウヰルリヤム」「ペンシヤミン」フランクリン等愛國慷慨ノ志士輩出シ、類ニ監獄改良ノ必要ヲ唱道シタル結果、社會公衆モ此事業ニ傾注スルコト漸ク深ク、又當時歐洲ノ彼岸ニ獄々タル監獄改良ノ聲ハ大西洋ヲ經テ一層高ク此岸ニ反響シ、此ニ獨立新勝ノ餘

勇ヲ鼓舞スル所アリテ研究尋繹ノ末遂ニ、千七百九十六年始テ分房制監獄ヲ「ペンシルビア」ニヤ「洲」ノ「フィラデルフィア」ニ創設シ「ソリタリー」システムニ據テ晝夜嚴格ナル分房離隔ノ監禁法ヲ實行ス、是即チ後世ニ分房制ノ範ヲ貽シタル所ノ「ペンシルビア」ニヤ「制」ト稱スルモノデアアル、其後幾何モナクシテ更ニ「ニューヨーク」洲ニ於テ一ノ監禁法ヲ考案シ之レニ據テ千八百二十年「アウブロン」ニ新監獄ヲ構造ス、之レヲ「アウブロン」制ト稱ス、而シテ前者ヲ「ソリタリー」システムト稱スルニ對シ、後者ヲ「サイレント」システムト稱ス、此二者ノ異ナル所ハ、前者ハ別異法ヲ施行スル極メテ峻嚴ナルモ、後者ハ之レニ反シ或ハ夜間寢臥ノ際ノミ獨居セシメ、或ハ屢室外ノ運動ヲ許シ、或ハ適當ノ作業ヲ與ヘテ之レニ從事セシムル等ノ寬嚴ニアリテ、詮ズル所ハ惡交ヲ絶チ善交ヲ獎メ、罪囚ヲシテ悔悟セシメント欲スル目的ニ於テハ、二者遂ニ一致ニ歸ス、然レドモ前者ニ對シ後者ノ創設セラル、ヤ、爾來互ニ相論難攻撃シテ毫モ讓歩セザルニ由リ、旗色二様ニ分ル、ノ結果ヲ見ルニ至リ

タ、然リト雖モ監獄改良ハ之レガ爲ニ着々其事業ノ歩武ヲ進メ、宇内一般ニ大ニ斯事業ニ傾注スル形勢ヲ呈スルニ至ル、茲ニ於テ英、佛、獨ヲ始メ其他歐洲各國ヨリ委員ヲ米國ニ特派シテ、新制實施ノ利害ヲ討究審査セシムルニ至リシガ、委員トシテハ各々見ル所アリテ、或ハ後設ノ「アウプルン」制ヲ是認スル者アリ、或ハ前設ノ「ペンシルプア」ニヤ制ニ歸信スル者アリタリト雖モ各々其復命ニ據テ本國ノ獄制ヲ一新シ、歐洲到ル所ニ監獄改築工事ノ着手ヲ見ルニ至レリ、而シテ英國ハ「ペンシルプア」ニヤ制ヲ採用シ、千八百廿二年ニ「ベントンプ」ニヤ制ヲ採用シ、其他ノ歐洲各國ハ重ニ「アウプルン」制ヲ採用スル所トナリテ、千八百廿五年「デンフ」ニ於テ、千八百三十八年「バーテン」ニ於テ、千八百三十九年佛國ニ於テ新監獄ヲ創設シ、拘禁行刑ノ方法ニ就テハ或ハ之レヲ理論ニ採リ、或ハ之レヲ實驗ニ徵シテ、益々研鑽ヲ積ミ、各國相競テ着々監獄改良ノ實効ヲ見ルニ至レリ、

第六節 萬國監獄會議ト教誨ノ開始

斯ク監獄改良ノ發展ニ伴ヒ、各國相競フテ斷案續出シ、之レガ爲ニ反テ改善ノ進行ヲ阻止スルコト少ナカラズ、茲ニ於テ斯道ノ先覺者「ミツタルマイエル、ユウリユウス、ネルネル、ワレントラツプ、ウエルケル」獨逸「スリンゲル」和「ドクベチア」白耳義「モーリウ、クリトーフ」佛國「ダフィット」丁「ホワイトウヨースリユツセル」英等ノ諸氏ハ、千八百四十六年ニ萬國監獄會議ヲ「フランクフルト」ニ開設シ、獄制上疑義ニ涉ル諸種ノ案件ヲ提出シ、又議論ノ絶ヘザリシ所ノ分房制度ノ利害ニ就テ審議ヲ盡シタル結果、教誨教育ヲ授ケ、作業ヲ課シ、或ハ典獄僧侶、醫士ヲシテ頻々ニ監房訪問ヲ爲スベキ條件ノ下ニ「ペンシルプア」ニヤ制ノ分房拘禁法ヲ是認スル斷案ヲ下シ、是ヨリ漸次分房制ノ勢力ヲ強クシ、教誨教育モ之レニ依テ其實行ヲ開始スルニ至リ、其他獄制一般ニ就テ大ニ新面目ヲ呈スルニ至リタノデアアル、

第七節 概論

三六

泰西各國ニ於ケル行刑變遷ノ一斑ハ上來ノ記述ニ依リテ粗ボ知ルコトヲ得ベシ、然レドモ行刑改良ノ動機ハ我國ノ歴史ト大ニ異リアルコトヲ辨ヘザルベカラズ、抑泰西諸國ニ在リテハ、古代民族ノ復讐的私權ガ遂ニ國家ノ法制ニ進化スト雖モ其目的ハ専ラ威嚇ヲ事トシ、以テ殘虐ヲ極メタル結果、民心ノ反感ハ自由平等ノ哲理ヲ主張シテ社會革命ノ動搖トナリ、學理ノ變遷ハ法制ノ改革ヲ促シ、或ハ宗教的革命ハ慈善博愛ヲ要求シ、或ハクエーケル、ジョン・ホワルド^{John Howard}ノ如キ犠牲者ヲ出ダシ、或ハウヰルリヤム、ベンジャミン、フランクリン^{Benjamin Franklin}ノ如ク愛國慷慨ノ志士輩出等ガ有力ナル動機トナリテ、主權者ヲ動かシタルニ由ルベシ、然ニ我國ニ於テハ之レニ反シ、神武天皇即位ノ元年始メテ罪名若干條ヲ定メ給ヒテ、之レヲ犯ス者ハ誓神拔除ノ法ニ依リ、専ラ去惡遷善ヲ以テ目的トシ給フ、故ニ、歷朝ハ其仁聖ヲ繼承シ給ヒテ、

或ハ寬ニ或ハ嚴ニ、法制ハ多少不同アリト雖モ、世々皆其德ヲ一ニシ給フコト炳然タリ、殊ニ清寧天皇ノ如キ、畏クモ親カラ囚徒ヲ錄シ給ヒ、聖武天皇ノ如キ、屢大赦、常赦、曲赦等ノ詔ヲ下シ給フ等ハ實ニ無窮ノ聖德ニシテ、古代未ダ萬國ニ見ザル所デアル、然レドモ其後政權武門ニ歸シ、或ハ亂世時代、或ハ幕政ノ末路ニ至リテハ、武斷的人權ヲ無視シ行刑ノ内容モ其慘狀ヲ極ムルコト、東西殆ド其軌ヲ一ニスルニ至レリ、茲ニ於テ明治元年王政復古ニ歸シ、即、明治天皇陛下至仁ノ聖旨ニ由リテ、行政百般ノ弊習ハ頓ニ此ニ洗除セラレ、法制ハ時代ノ進運ニ伴ヒ歐洲文明國ノ成例ヲ參酌シ給フト雖モ、其義理ニ至リテハ祖宗ノ懿德ヲ宣揚シ給ヒタル所ニシテ、即チ我國監獄ノ改良ハ畏クモ一視同仁ノ聖德ニ由來シタルモノト知ルベシ、

第三章 近代ニ於ケル各國ノ行刑

第一節 日本ノ刑法一斑

三七

我國近代ノ刑法ハ、明治革新以後ノ法制ニシテ、成文法第三期歐羅巴法制ノ繼受ニ屬スト雖モ、其義理ニ於テハ祖宗ノ懿德ヲ宣揚シ給ヒタル所ノ至仁至聖ニ在シマス、明治天皇ハ自由刑ヲ本位トシ給ヒ、以テ社會ヲ威嚇矯正セシムルト同時ニ、犯人其者ヲ懲戒威化シ給フ所以ニシテ、所謂ル其罪ヲ憎ンデ其人ヲ憎マザル主義デアル、依テ明治三年十二月ニハ新律綱領ヲ發布シテ徒刑ノ制ヲ定メ、同六年二月ニハ改定律令ヲ發布シ施體刑及徒流刑ヲ廢シテ懲役終身ノ刑ヲ設ケラレ、又同十三年七月ニハ佛蘭西刑法ヲ參酌シテ、之ヲ發布シ、同十四年一月ヨリ施行セラレタル刑法ハ自由刑ヲ類別シテ、徒刑、流刑、懲役、禁獄、禁錮、拘留及監視ノ七種ト爲シ、就中懲役、禁獄、禁錮ハ各々重輕ノ二種ニ分チ以テ重輕罪ノ主刑ト爲ス、又拘留ハ違警罪ノ主刑トシ、監視ハ輕重罪ニ對スル附加ノ自由刑トス、而シテ流刑、禁獄、禁錮ハ何レモ破廉耻ニアラザル所ノ犯罪ニ課シタルヲ以テ、所謂ル名譽ヲ毀ラザル所ノ自由刑ニ屬セラレタノデアアル、然ニ時代ノ進運ハ尙之レニ満足セズ、即チ明治

四十一年四月法律第四五號ヲ以テ發布セラレタル刑法ハ、獨逸刑法ヲ參酌セラレタルモノニシテ、二編四十四章二百六十四條ヲ以テ組織セラレタル現行ノ刑法即チ是レデアアル、

第二節 泰西ノ刑法一斑

泰西諸國ニ在リテハ古代ヨリ中古ニ至ル迄、國權薄弱法紀確立セザリシ爲メ、個人ノ勢力ヲ怖レテ、死刑、體刑、追放、等アラユル峻酷ナル刑法ヲ用井テ、犯人ヲ社會外ニ驅逐スルコトニ努メタルモ、漸次國權鞏固法紀確立シテ個人ノ勢力ハ容易ニ國家治平ノ基礎ヲ攪亂スルニ足ラズ、加之ズ、中古ノ末葉ニ至リテハ、改良スベキ時機ニ迫リタルハ勿論、社會人衆ノ道義的觀念及經濟的思想ノ發達ニ由リ、犯人其者ヲシテ漫ニ之レヲ驅逐セズ、寧ロ收容威化スルノ方法ヲ用井テ、之レヲ社會ニ復歸セシメンコトヲ努ムルニ至リタ、茲ニ於テ刑法ノ主義モ、一大變化ヲ來タシ、近代ハ我國現行法ノ如ク、自由刑及

財産刑ヲ本位トシテ體刑ヲ廢シ、死刑ハ存在スルモ適用ノ範圍ヲ減縮シ、名譽刑ヲ附加刑トス、而シテ其自由刑ヲ、流刑、徒刑、懲役、禁獄、禁錮等ノ名稱ヲ附シテ類別適用ヲ試ミタルモノハ佛蘭西ノ「コルドベナール」デアル、此法典ハ歐洲各國ノ刑法ノ上ニ強大ナル勢力ヲ及ボシ、何レモ之レニ倣ヒ、之レヲ繼受參酌スルニ至リタ、不文法の英國ノ如キモ之レヲ襲用シ、十九世紀ニ於テハ時々單行法ヲ以テ昔日ノ刑法ニ更正ヲ加ヘ、流刑ハ全廢シ、死刑適用ハ其區域ヲ制限シ、體刑ノ笞ハ僅ニ附加刑トシテ、或ル特定ノ罪囚ニ施行スルニ止マリ、結局自由刑ヲ以テ刑ノ重要ナル主體ト爲スニ至リタノデアル、

第三節 各國ニ於ケル監獄ノ一斑

英國ニ在テハ中古監獄改良ノ主唱者「ホワルド」氏ノ出現以來時ニ多少ノ張弛アリタリト雖モ、孜々トシテ大ニ此ニ熱心計劃スル所アリテ、千八百十一年ニハ「ミルバング」ニ於テ階級制ヲ實行シ、千八百四十二年ニハ「ベントヴ

井ル」ニ於テ分房制ニ基ク所ノ模範監獄ヲ建設シ、或ハ不適當ナル舊監獄ノ構造ヲ廢閉シテ、新式ノ改築ヲ強制シ、或ハ改築委員ヲ組織シテ監獄法ノ勵行ニ務ムル等、常ニ改良ノ進路ニ向ツテ其歩武ヲ進メタリト雖モ、英國固有ノ自治制トシテ治獄ノ事ヲ地方團體ニ委任シアリシ爲ニ、却テ其進歩ヲ阻害セラレシモ、千八百七十七年ノ監獄法ヲ以テ英國及「ウエールス」ニ於ケル凡テノ監獄ヲ國家ニ嫁シ、其管掌經理ハ舉テ之レヲ中央政府内務省ノ事務ニ移スニ至リタル結果、此ニ始テ獄制整備ノ緒ニ就キ、現今ニ於テハ殆ド全國ヲ通ジテ分房制ノ監獄ニアラザルハナク、又刑事被告人モ凡テ分房組織ニ於テ拘禁スルニ至リタ、

北米合衆國ニ於テハ分房制監獄ノ率先者トシテ「ペンシルブア」ニヤ、制及「アウブレン」制ノ創始セラレシ事ハ、監獄史上ノ名譽トスル所ニシテ、敢テ此ニ贅言ヲ要セザルモ、佛蘭西ニ在テハ「ナポレオン」第一世帝ガ、千八百十一年ニ、禁錮囚及被告人ヲ拘禁スル所ノ國庫費支出ノ監獄ヲ地方費ノ負擔ニ移

シタルニ、之レガ却テ監獄改良ノ蹉跌トナリテ、行刑ノ紊亂犯罪ノ暴殖ト成リ遂ニ千八百三十年ノ革命ヲ經テ社會ヲシテ監獄改良ノ必要ヲ叫バシムルニ至ラシメ、研究調査ノ末「ヒューモン」及「トキユービル」ノ二氏ヲ米國ニ派遣シ「ペンシルブアニア」制及「アウブルン」制ノ利害ヲ調査セシメ、千八百三十四年ヲ以テ始メテ獄制改良法案ヲ議會ニ提出シ幸ニ下院ノ可決ヲ經テ、千八百四十七年ニ上院ノ議事日程ニ上リタルモ不幸ニモ復タ、千八百四十八年ノ革命ニ遭遇シ、第三帝政ノ成ルト俱ニ終ニ此新法案モ書餅ニ歸シ、千八百五十三年ニハ、時ノ内務大臣ヨリ分房制禁止ノ訓令ヲ發スルニ至リ、折角改築セシ分房制監獄モ無益ニ屬シタリト雖モ、時勢ハ再ビ獄制ノ改良ヲ促迫シ、終ニ千八百七十五年ノ法律ヲ以テ刑事被告人及刑期一年以下ノ禁錮囚ハ、凡テ之レヲ分房制監獄ニ於テ拘禁スベキコトヲ確定シ、本法實施ノ費用モ國庫ヨリ補助スベキコトヲ令達スルニ至リシ以來漸次好運ニ向ツタノデアアル、

其他伊太利、白耳義、獨逸、和蘭等ハ何レモ、分房制、折衷制、階級制等ノ利害ヲ研究シテ、各々獄制改良ニ努メタリト雖モ、就中和蘭ノ如キハ、既ニ千八百二十三年ノ議會ニ於テ、社會ハ罪囚ヲ矯正感化スルノ義務ヲ有ストノ旨義ヲ宣明スルニ至ラシメ、千八百八十四年ニハ監獄則ヲ制定發表シ、爾後六年ヲ經テ之レヲ實行シ、漸次今日ニ及ビタリト云ヘバ、比較的改良先進國デアルト云ハネバナラス、

我國ニ在テハ明治ノ革新即チ一視同仁ノ聖旨ニ因テ監獄改良ノ端緒ヲ開カレタノデアアル、依テ明治十一年「ストツク」ヲアルム「萬國監獄會議委員長「イーシーワイズ」ニ宛テタル、我が内務故大久保公司法故大木伯ノ兩大臣、連署ノ公文ニハ左ノ如ク云ツテアル、

夫レ文武天皇大寶元年律令ヲ撰定シ、囚獄司ヲ置キ其方法ヲ設ケシ以來千有餘年間、時ニ隆汗興衰アルヲ以テ屢變更スルトコロアリ、延テ今上天皇明治元年ニ至テ、政法一新、囚獄ハ人權ヲ縮メ、其生命ノ繫ルトコロナル

ヲ以テ、最モ慎重ヲ加ヘ、其方法ヲ改良スルニ注意ス、止、以上抄出

四四

監獄改良ノ端緒既ニ斯ノ如シ、而シテ明治二年ニハ刑部省ニ囚獄司ヲ設クルノ制ヲ定メ、專ラ優恤ヲ旨トシ、從來ノ慘狀ヲ剷除スルコトニ努メ、同年ニハ新律綱領ヲ公布シテ、徒刑ノ制ヲ定メ、神儒佛ノ學者ヲシテ精神教養ノ道ヲ開キ、改良感化ノ旨義ヲ實行セラル、ニ至リタノデアル、當時ノ徒場制規ノ節目ヲ舉レバ左ノ如シ、

一、徒刑滿テ後、有籍ノ者ハ各自ノ生業ヲ營ムハ勿論、無籍ノ者ト雖モ優恤ノ處置アルニ付宜シク惡意ヲ改メ善事ニ遷ルヲ旨トスベシ、

一、期限内ハ辛勞ノ作業ヲ命ズルモ、懲罰中ナレバ其命ニ背クベカラザルハ勿論、滿期放免ノ時ニ至テ生業ノ資金多カラシコトヲ冀望シ、命ズル所ノ作業ヲ勉強スベシ、

又學舎ノ定則中ニハ左ノ條項アリ、

一、教授所ニ入ル者ハ博聞多識ヲ求メズ、只管放心ヲ求ムル一端ヲ得ンコ

トヲ欲スベキコト、

一、凡テ役使ノ餘暇ヲ以テ文ヲ學ビ、人倫五常ノ道ヲ篤ク心得ルコトヲ緊要トシ、總テ行有餘力、則以學レ文ノ意ヲ體認スベキコト、

而シテ明治四年七月刑部省ヲ廢シ、司法省ヲ置クニ及ンデ、一旦囚獄司ヲ之ニ移スト雖モ、遂ニ地方廳ノ管理ニ改メ、司法省ハ其法規ノ執行ヲ監督スル所ト爲ス、然レドモ猶泰西諸國ノ改良シタル獄制ヲ參酌シテ我ガ獄制ノ革新ヲ計ラン爲メ、政府ハ特ニ囚獄權正小原重哉氏ヲ東洋英領地方香港、新嘉坡、等ニ派遣シテ、其實況ヲ調査セシメ、使臣復命ノ結果、明治五年十二月監獄則及監獄則圖式ヲ制定發布スルニ至リタ、其法規ノ綱目トシテハ是非ノ議論ナキニ非ズト雖モ、其精神ニ就テ論ズレバ今日歐米ノ監獄則ト雖モ遠ク之レニ過ルヲ得ズ、殊ニ當時一躍シテ夜間分房制ヲ採用シ、又遇囚ニ就テモ階級法ニ據テ、最モ精密ニ規定シタル如キハ比較的完全ナルモノト謂フベキデアアル、然レドモ經費ノ許サバル事情ニ依リ、一般ニ監獄ノ改築ヲ實行

四五

スルコト不能ニシテ、明治五年十一月ニハ左ノ布告ヲ發セラレタ、
 今般監獄則並圖式御發布相成候尤モ一般ノ監獄一時御改造相成兼候ニ
 付、追テ東京府下ニ於テ造築相成ベク候間各地方ニ於テハ禁囚處遇及懲
 役ノミ規則ノ通施行可致候事、

而シテ同六年四月ニハ更ニ左ノ布告ヲ發シ、遺憾ナガラ改築ハ中止トナリ
 タノデアル、

壬申第三七八號布告監獄則並圖式ヲ頒布シ、且ツ禁囚處遇及懲役法ノミ
 先施行可致旨相達、置候處其詮議ノ次第有之ニ付當分總テ從前ノ通可取
 計候事、

然レドモ同年二月第七一號布告ヲ以テ、從來ノ徒場(現今ノ監獄也)ヲ懲役場ト改稱
 セラレ、同年五月ニハ更ニ改定律令ヲ公布シテ施體刑ヲ廢シ、其他刑名ヲ取
 捨シテ斬絞ノ外ニ懲役終身ノ刑ヲ設ケ、徒流ノ刑ヲ廢セラレ、同七年十一月
 司法省及各裁判所々屬ノ監倉ヲ除ク外、全國ノ未既決ノ兩監ヲ內務省ノ統

轄ニ屬セシメ、同九年ニハ更ニ其他ノ監倉ヲモ盡ク內務省ノ統轄ト爲シ、東
 京ハ警視廳、自餘ハ道府縣ニ司管セシメ、監獄ノ經費モ遂ニ國費ヲ以テ支辨
 スルコトニ一定セラレタルニ依リ、監獄ノ面目殆ド一變スルニ至リタノデ
 アル、然ニ明治十年西南役ノ餘波トシテ財政整理ノ止ムナキニ至リ、同十三
 年太政官布告第四八號ヲ以テ、監獄費及監獄建築修繕費ヲ同十四年度ヨリ
 同卅三年九月ニ至ル期間約廿年ハ地方稅支辨ニ移シタルヲ以テ、斯業ノ進
 歩上ニ大ナル頓挫ヲ與ヘタノデアアル、然レドモ同三十三年十月以後ハ國庫
 支辨ニ復興シ、同三十六年三月勅令第三五號ヲ以テ官制ヲ改正シ、監獄ノ管
 理ヲ司法大臣ニ屬セシメラレタルニ由リ、各地監獄ノ改築ヲ始メ、職員ノ淘
 汰並ニ待遇及職務規程ハ勿論、禁囚處遇ノ方法等漸次改良ヲ進メ、今ヤ殆ド
 文明先進國ヲ凌駕スルニ至リタノデアアル、而シテ現行ノ監獄法ハ明治四十
 一年三月法律第二八號、同施行規則ハ同年六月司法省令第一六號ヲ以テ發
 布セラレ、其法制ハ主トシテ獨逸監獄法ヲ參酌スト雖モ、拘禁法ハ獨居ト雜

居トヲ折中シ、處遇法ハ階級制度ヲ採用セラレテ、教誨教育及醫療衛生等ノ方法モ亦周到精密ヲ極メ、能ク其面目ヲ更新セラレタリト云フモ敢テ誣言ニ非ザルベシ。

第四節 概論

近代ニ於ケル各國監獄ノ一斑ハ上述ノ如シ、然レドモ世人ノ多クハ因襲ノ久シキニ囚ハレ、現今ニ在リテモ、監獄ヲ目シテ穢土ト爲シ、或ハ行刑ノ主義ヲ辨ヘズ、或ハ教誨ノ意義ヲモ知ラザルノ結果、種々ノ誤解ヲ生ズルコトハ洵ニ時代後クレノ甚ダシキモノニシテ亦感レムベシト雖モ、之レガ爲ニ行刑政策ノ發展ヲ阻止スルコト尠ナカラザルヲ以テ、上ニ既ニ東西著名ノ數國ニ亘リ、古代ヨリ現今ニ至ル行刑沿革ノ一斑ヲ舉ゲ來リテ、之レニ評論ヲ試ミタリト雖モ、猶未ダ疑惑ノ氷解セザルモノアリ、曰ク行刑ノ沿革果シテ上述ノ如シトセバ、泰西ニ在リテハ中古既ニ行刑改良ノ爲ニ犠牲者ヲ出

ダシ、或ハ革命黨ノ奮起スル所アリテ、急速ニ改良ノ歩武ヲ進メタルガ如シ、然ニ我國ニ在リテハ當時政權武門ニ歸シテ、行刑ノ慘狀ハ東西其軌ヲ一ニセシニモ係ラズ、明治革新ニ至ル迄未ダ之レニ向ツテ改良論ノ起ラザリシハ是レ一ノ疑惑デアル、蓋シ此疑惑ニ對シテハ種々ノ解釋ヲ爲ス者アリト雖モ、予ハ左ノ如ク辨解スルヲ適當ナリト信ズ、

一、中古幕政時代ニ於ケル行刑ノ目的ハ庶民ニアリテ、中流以上ノ武士及僧侶ノ如キハ偶々犯罪アリト雖モ揚屋牢ト稱シテ其組織ハ庶民ノ獄屋ニ同ジカラズ、例セバ佛國「バスタール」ニ於ケル國事獄、又ハ獨逸ニ於ケル城寨獄ノ如ク、大ニ寛大ナル規則ヲ以テ之レヲ優遇セシニ依リ、改良ヲ論ズベキ資格及智能ヲ有スル者ハ、一般庶民ニ對スル行刑ハ慘虐ヲ極ムト雖モ、毫モ其痛痒ヲ感ゼザリシニ由ル、

一、庶民ハ無智無能ノ集團ニシテ、之レニ對スル爲政ノ要訣モ民ヲシテ依ラシムベシ知ラシムベカラズノ主義ヲ採リタルヲ以テ庶民ハ常ニ蚩

タトシテ恰モ奴隸ノ境遇ニ在ルガ如ク、行刑其他一般ノ政治上ニ於テモ毫モ之レヲ可否スルノ知能及其權威ナカリシニ由ル、

時代既ニ斯ノ如シ、是レニ因リテ我國ニ於テモ當時歐米ノソレト同ジク、地ヲ劃シテ獄ト爲ス、民尙ホ之レヲ懼ルト云フ風情ニテ、慘虐苛酷ハ行刑ノ要素ノ如ク思惟シ、世教モ之レヲ説キ、學者爲政治家モ亦之レヲ訓養シテ深ク國民ノ法想ニ浸染セシメ、行刑ヲ語ル者ハ必ズ酷虐ヲ連想セザルハナク、社會ノ輿論ハ凡テ酷虐ヲ以テ行刑本然ノ性質ナリト確信シ、僧侶ニ於テモ歐米ノ如ク行刑ニ對シテ同情ヲ寄スルモノ殆ト皆無ニシテ、或ハ説クニ因果應報ヲ以テシ、或ハ自然ノ天數トシテ、其酷虐ノ正當ナルヲ認メタルガ如シ、是レ等ノ事情ニ因リテ當時改良論ノ起ラザリシモ敢テ怪シムニ足ラズト謂フベキデアル、

第二編 本論

第一章 刑法ト教誨

第一節 刑罰發達ノ順序

刑法ハ國家及社會生存上ニ於ケル必要條件ニシテ、苟クモ犯人アレバ正理公道ノ要求トシテ、國家ハ之レニ刑罰ヲ科セザルベカラズ、換言セバ刑罰ハ犯罪者ニ對シ國家ガ被ラシムル所ノ苦痛ニシテ、即チ犯人其者ノ惡因ニ對スル惡報デアル、而シテ古代ヨリ各國ニ行ハレシ所ノ刑罰ヲ概括シテ云ハ、以下ノ五種ニ過ギザルベシ、

一、生命刑、二、身體刑、三、名譽刑、四、財産刑、五、自由刑、以上五種ノ中第一ニ發達シタルモノハ生命刑ニシテ其發達ノ早キ理由ハ左ノ如シ、
 1、生命刑ナルモノハ斬絞、投水、車裂、牛裂、磔、炮烙、煮殺等ノ死刑ニシテ古代未開ノ時代ト雖モ、此死刑ヲ實行スルコトハ極メテ容易ナルニ由ル、

口、死刑ハ罪人ノ再ビ社會ニ出ヅベキコトナキガ故ニ再犯ヲ防グニ確實ナルニ由ル、

ハ、死刑ハ衣食費等ヲモ要セズ、經濟的利益ナルニ由ル、

ニ、死刑ハ未開時代ニ於テモ被害者ニ満足ヲ與ヘ且ツ他ヲ威嚇スルノ効多キニ由ル、

第二ニ發達シタルモノハ身體刑ニシテ支那ニ於テハ之ヲ肉刑ト云フ、是モ死刑ノ如ク其執行甚ダ容易ニシテ、或ル種類ニ就テハ死刑ノ如ク再犯ヲ防グニ確實ナルモノアリ、例ヘバ窃盜ヲ爲シタル者ハ腕ヲ切り、或ハ姦通ヲ爲シタル者ハ其陰部ヲ斷チ、又ハ毛髮ヲ剃リ、黥ヲ施ス等多費ヲ要セズシテ其効力多シ、是即チ生命刑ト俱ニ發達ノ速カナリシ所以デアル、

第三ニ發達シタルモノハ名譽刑ナリト雖モ前二刑ノ如ク廣ク一般ニ之ヲ行フモノニ非ラズ、即チ犯人ニシテ官位勳章ヲ帶ブルモノ極メテ稀ナルノミナラズ、其多クハ破廉耻罪ノ者ニテ之レ等ニ對シテハ名譽刑ノ効ナシ

然レドモ之レヲ全廢スルコトヲ得ザルヲ以テ、現今ハ附加刑トシテコレヲ存シ或ル一部ニ適用ス、

第四ニ發達シタルハ財産刑ニシテ、是モ名譽刑ト同ク廣ク一般ニ行ハレシニアラズ、是即チ刑罰ナルモノハ平等ヲ原則トスレドモ、財産刑ハ平等ニ苦痛ヲ與フルコト困難ニシテ、例ヘバ貧賤ノ者ニ十圓ノ罰金ヲ科セバ強ク苦痛ヲ感ズレドモ、富貴ノ人ニ之レヲ科スレバトテ更ニ苦痛ヲ感ゼザルガ故デアル、

第五ニ發達シタルハ則チ自由刑デアル、此刑ニシテ他刑ヨリ發達ノ遲キ所以ハ、之ヲ執行スル方法ニ於テ多額ノ費用ト、其他規律、作業、教誨、教育、醫療、衛生等ノ諸要素ヲ要スルニ依リ、人民ノ智力ト富力ノ發達ニ因ラザレバ執行スルコト能ハザルニ由ル、近代ニ至リテハ各國共ニ此刑罰ヲ本位トシ、其足ラザル所ハ、生命刑、財産刑、名譽刑等ヲ以テ補フニ過ギザルベシ、是即チ此刑ハ諸刑中ニ於テ各人ニ對シ自在ニ分割シ、且ツ平等ニ執行スルコトヲ得

第二節 刑罰ノ原因ト其目的及時代ノ關係

國家ガ刑罰ヲ科スルハ犯罪アルガ故ナルカ、又ハ犯罪ヲ前提トシテ他ノ目的ノ爲ニ科刑スルモノナルカハ古來學者ノ論争スル所デアアル、此問題ノ解決ニ就テハ、絶對主義、相對主義、折中主義ノ三大區別ノアルコトヲ知ラザルベカラズ、依テ以下其大要ヲ説明スベシ、

第一、絶對主義、此主義ハ舊派ノ主張スル所ニシテ消極的議論ニ屬ス、曰ク犯人ニ刑罰ヲ科スルハ即正義公道ニ基キタル因果必然ノ真理デアアル、換言スレバ刑罰ハ犯人其者ヲ罰スルガ目的ニシテ、其他ニ何等目的トスルモノアルニアラズト決論スルノデアアル、此主義ノ學派トシテ著名ナル「ベルネル」氏ハ國家重要ノ活動ハ人類至難ノ理ニ基ク、刑罰權ノ作用ハ國家重要ナル活動ノ一部分タリ、故ニ刑罰權ノ作用ハ其目的刑罰權ノ外ニ

存セズシテ、刑罰ソレ自身ノ内ニアルナリト云ヘリ、是レ即チ刑罰ト犯罪トハ道義上、宗教上、若クハ理性上、必要的ニ結合スルモノニシテ、所謂ル惡ニ酬フルニ惡ヲ以テスルト云フ道德的原則ト其規ヲ一ニスルノデアアル、故ニ之レヲ應報主義又ハ事實主義トモ稱ス、而シテ刑罰ハ常ニ犯罪責任ト權衡ヲ保ツコトヲ要ス、是レ實ニ正義ノ要求スル所ニシテ絶對的ノモノナリト論ジ、從テ刑罰ヲ以テ其レ自體正當ノモノナリト觀察スルガ故ニ、或ハ之レヲ純正主義、正義主義、純理主義、道德主義ト稱スルノデアアル、而シテ應報主義ニハ左ノ如キ四種ノ區別ガアル、

イ、神意的應報主義、コレハ「シユタール」氏ノ説ク所ニシテ、即チ應報ヲ以テ神意ニ因ルモノトス、換言セバ犯罪ハ神意的秩序ニ違犯スルノデアアルカラ、應報ヲ神意的ニ因ルモノトスルノデアアル、

ロ、理生的應報主義、コレハ「ヘーゲル」氏ノ説ク所デアリテ、犯罪ハ理性ノ否定ニシテ、刑罰ハ犯罪ヲ撲滅スルモノナルガ故ニ、即チ理性ノ否定ニ由

リ、理性ノ支配力ヲ克復スルモノト爲スノデアアル、

ハ、道德的應報主義、コレハ一七八八年ニ、カント氏ノ説ク所ニテ、犯罪ヲ以テ道德上ノ秩序違犯ヲ以テ應報主義ノ起因ナリトス、

ニ、法律の應報主義、コレハ一七九九年ニ至リテ、カント氏ノ説ク所デアリ

テ刑罰ハ正義ノ要求ニシテ法律上ニ於ケル絶對的命令ナリトス、

猶其他絶對主義ニ就テハ中世ノ觀察及「ユクツエイ」氏ノ損害賠償説モアリテ、或ハ之ヲ治療主義ト稱ス、此主義ハ刑罰ヲ以テ不正行爲ヨリ生ジタル害惡ヲ調和恢復シ、以テ不正ヲ治療セントスルモノデアアル、即チ刑罰ハ賠償ト等シク不正ナル害惡ヲ解消スルモノニシテ、其レ自體毫モ痛苦若クハ害惡ナルモノニアラズトス、蓋シ茲ニ注意ヲ要スルコトハ、所謂治療ノ目的物ハ客觀事實タル害惡其者ニシテ、罪人其者ヲ治療スルニハアラザルナリ、

第二、相對主義、此主義ハ、積極的議論ニシテ、刑罰ハ犯罪ヲ爲シタルガ故ニ之レヲ科スルモノニアラズ、却リテ犯罪ヲ爲サシメザル爲メニ之ヲ科

スルモノトス、換言スレバ刑罰權ヲ行使スルハ、過去ニ對スル應報ヲ目的トスルニアラズシテ、將來ノ犯罪ヲ豫防スルヲ以テ目的トスルノデアリテ道德上、善ト惡トノ區別ヲ實利ノ標準ニ求ムルモノト其原則ヲ等フス、從テ犯罪ニ對シ刑ヲ科スルヤ否ヤハ、保護ノ目的ヲ達スルヤ否ヤニ依リテ定マルベク、且ツ刑ノ輕重モ亦犯罪事實ニ對スル責任ノ大小ニ依リ定マルベキニアラズシテ却リテ、保護ノ目的ニ從ヒ定マルモノデアアル、故ニ此主義ニ於テハ刑罰自體ヲ正當ノモノトハ認メスノデアアル、蓋シ刑罰ノ正當ナル所以ハ之レヲ科スルニ依リ、一定ノ目的ヲ達シ得ルガ故ナリト觀察ス、依テ此主義ヲ、或ハ目的主義、保護主義、利益主義、實利主義又ハ必要主義ト謂フ、而シテ必要主義トハ社會必要主義トモ稱シテ、必要ノ語ハ一面ニ於テ犯罪ニハ概念上常ニ刑罰ヲ必要トスルノ意ト、他面ニ於テハ一定ノ目的ノ爲メ刑罰ハ必要ナリトノ意ニ解スルヲ得ルモノナリト雖モ茲ニ所謂ル必要トハ、後者ヲ意味スルモノニシテ、前者ヲ意味スルモノニ

アラズ、何トナレバ前者ハ絶対主義ノ概念ニ屬スルカラデア、而シテ相對主義ハ「ベントム」氏ノ實利主義ニ於テ明白ニ其性質ヲ論ジテアレドモ、此主義ノ目的ハ將來ノ犯罪ヲ豫防スルニアリト解スル者多クシテ、其豫防ニ於ケル見解ニハ大要左ノ如キ區別アリ、

一、一般豫防主義、コレハ一般民衆ヲシテ將來罪ヲ犯サシメザルヲ以テ目的ナリトス、之レヲ更ニ小分セバ左ノ如シ、

イ、「ヒランヂエリ」ノ脅嚇主義、此主義ニ從ヘバ、受刑者ハ屢刑ノ一般目的ノ爲ニ犠牲タルコトアルヲ免カレズ、換言スレバ犯人ニ對スル刑ノ執行ニ因リ、社會一般民衆ヲ脅嚇シ、因テ犯罪ヲ豫防セントスト云フ意義デア、古代盛ニ行ハレタル梟首、磔、車裂等ノ殘虐ナル治罪方法ハ皆此主義ヨリ出デタルモノニシテ、支那ノ子産モ法ハ猛ナルコト烈火ノ如クナラシムベシト云ヒ、獨逸ノ「ミツテルマイエル」等ノ刑法學者モ、此脅嚇主義ヲ唱道シタノデタル、

ロ、「フオイエルバツ」ノ心理強制主義、此主義ハ或ハ制心主義、又ハ威示主義トモ謂フ、之レハ刑罰ヲ豫定シ以テ犯罪ノ心理的成立原因ヲ抑壓スルヲ以テ第一位ノ目的トシ、刑ノ執行ハ單ニ第一目的ヲ補充スル爲ナリト觀察ス、又「ハウエル」ハ此主義ヲ變體シ、刑法ハ威迫若クハ威嚇ノ具タラズシテ、國民教育若クハ警察制度ト等シク民衆ヲ豫戒訓告スルモノナリト説ク、之レヲ豫戒主義、或ハ警戒主義ト謂フ、

以上脅嚇主義ハ刑法ノ沿革史上ニ其實跡ヲ存スルモ、現今ノ刑罰觀念ニ適セズ、心理強制主義ハ刑罰目的ノ一部ヲ説明シタルモノデア、

ハ、防衛主義、此主義ハ或ハ正當防衛、又ハ社會防衛主義ト謂フ、此主義ノ云フ所ハ、各個人ガ其生存上危險ヲ防衛シ得ルト等シク、國家或ハ社會モ亦其自存上危險ナル犯罪ヲ防衛スルノ權能ヲ有ス、刑罰ハ犯罪ヲ豫防シ國家自衛ノ道ヲ講ズル方法ナリトス、然レドモ其直接ノ目的ニ就テハ論者ノ所説區々ニシテ「セルビン」ハ第一位ニ一般民衆ノ脅嚇ヲ、第二位ニ所

犯者ニ對スル保安ヲ目的ナリトシ「マルチン」ハ犯人及一般國民ニ對シ毀損セラレタル法ノ尊嚴保持ヲ以テ目的ナリト認メ「ロマニオシー」ハ犯人及其他ノ者ヲ脅嚇スルニアリトス「シユルツエ」ハ單ニ犯人及他ノ者ヲシテ更ニ侵害行爲ヲ爲サシメザルヲ以テ刑ノ目的ナリト云ヘリ。

二、特別豫防主義 之ハ新派及第三派ノ主張スル所ニシテ既ニ犯罪シタル者ニ對シ其將來ノ犯罪ヲ豫防スルヲ以テ刑罰ノ主要ナル目的ナリトシ刑罰ノ程度ハ犯人ノ非社會性ヲ標準トシテ之レヲ決スベキモノトス、故ニ或ハ之レヲ人格主義ト稱シ、又ハ威嚇ヲ主トシ、改善ヲ主トシ、淘汰ヲ主トスル者モアル、即チ「グロルマン」氏ハ豫防說ニ於テ其性質ヲ辯明シテ云ク、威嚇可能ノ犯罪人ニ對シテハ之レヲ威嚇スルニ依リ、將來ノ犯罪ヨリ遠ザカラシムベク、又威嚇不能ノ犯罪人ニ對シテハ保安處置、即チ之レヲ社會ヨリ排除スルヲ要スト爲ス、又其他改善主義ハ改良又ハ威嚇主義ト稱シテ、犯人ノ非社會性ヲ改善シ淘汰シ、以テ社會適格者タラシメテ將

來ニ罪ヲ犯サシメザルヲ刑罰ノ目的ナリト主張ス、而シテ此改善主義ニモ左ノ三說アリ、

イ、道德的改善主義 コレハ「クラウセ」氏ノ說ニシテ、刑罰ヲ以テ、犯罪ニ因リ表白セラレタル犯罪人ノ不道義ナル性向ヲ改善セントス、此主義ノ目的トスル所ハ犯人ヲ根本的善人タラシメントスルノデアル、

ロ、智能的改善主義 コレハ「グロース」氏ノ說ニシテ、此主義ニアリテハ、科刑ニ因リ犯罪人ノ不充分ナル智能ヲ補足シ、以テ完全ナル能力ヲ有スル國民タラシメントスルノデアル、

ハ、法律的改善主義 コレハ「ステルツエル」氏ノ說ニシテ、此主義ハ科刑ニ因リ、外界ニ對スル犯罪人ノ秩序的意思ヲ開發増進シ、因テ其者ヲシテ一般保安ニ害ナキ者タラシムルニアリト爲ス、故ニ此主義ニ於テハ犯罪人が道德的善人即チ根本的ニ改良セラレタルヤ否ヤハ之レヲ問フコトナク、單ニ其者が吾人ノ共同生存ヲ害セザルニ至ルヲ以テ十分ナ

三、民約主義、之ハ契約主義、又ハ社會契約主義トモ稱シテ、此主義ハ犯罪人ハ其行爲ニ因リ、國家或ハ社會契約ヲ破壞シタルモノト認メ、其結果トシテ、犯罪人ハ共同團體ヨリ排除セラレベキニ至リタルモノトス、然レドモ犯人ヲ無條件ニ追放センヨリハ、寧ロ公安ニ牴觸セザル限り、契約破壊ニ對スル刑罰ト云フ賠償方法ヲ用フルコトニ依リ、團體ニ止マラシムルヲ以テ有益ナリト爲ス、此觀察ヨリシテ、民約主義ハ相對主義ニ屬スルコト、ナル、而シテ其他刑罰ノ目的ニ付テハ論者各々見解ヲ異ニシテ云ク、「ホツプス」ハ單純ナル契約ハ容易ニ破壞セラル、ヲ以テ刑罰法ニ依リ脅嚇スルヲ要スト主張シ「ベツカリア」ハ刑罰執行ノ威嚇ニ依リ、犯人ノ契約上ノ義務ヲ保全シ、犯人以外ノ者ヲシテ惡例ニ倣ハシメザルヲ目的ト爲スト説キ「フイヒテ」ハ所犯者ノ賠償契約ニ因リ、改良刑ニ服スルモノナリト論決セリ、以上「ホツプス」及「ベツカリア」ノ說ハ一般豫防主義ニ屬シ「フイヒテ」ノ說ハ特別豫防主義ト認ムベシ「ルウソウ」ノ說モ「フイヒテ」ト同種ニ屬スルノデア、

第三、折衷主義、之ハ「グロチウス、ロシイ、ベルネル、ケストリン」諸氏ノ所論ニシテ、此主義ハ第一絕對主義ト、第二相對主義ノ長短ヲ折衷シタルモノデア、故ニ説明ノ基礎ハ絕對主義ノ原理ニアリ、曰ク刑罰ハ正義ノ觀念ヲ脱逸スベキモノニアラズ、何トナレバ目的ハ手段ヲ神聖ニスルコト能ハザレバナリ、然レドモ正義ノ觀念ニ基キテ刑罰ヲ行フニハ社會秩序ノ維持ニ必要ナル範圍ヲ超ユベカラズ、而シテ正義ノ觀念ハ刑罰ヲシテ犯罪ニ因リ社會ノ被ルベキ危害ノ大小及犯罪ノ情狀ニ比例セシムルニアリ、換言セバ刑罰ハ一種ノ害惡ナルヲ以テ、必要ナキニ之レヲ科スルハ國家ノ損害デア、犯罪ハ刑罰ノ原因ヲ爲スモノナリト雖モ、此一事ヨリシテ國家ニ刑罰義務ヲ生ズルモノニアラズ、國家ハ單ニ犯罪ニ對シ科刑ノ權利ヲ有スルノミ從テ必要ニ應ジ其權利ヲ行使セザルベカラ

六三

ズ、而シテ行使ノ必要ハ過去ノ事實タル犯罪ヨリ生ズルモノニアラズシテ、保護ノ目的ニ從ヒテ定マルモノトスルノデアル、斯ノ如ク折衷主義ハ一方ニ於テ過去ノ犯罪事實ヲ刑罰原因ト爲シ、他方ニ於テハ將來ニ對スル一定ノ目的ヲ科刑ニ必要ナル分子ト認ムルノデアリテ、所謂ル雙面觀察ノ學說デアル之ヲ要スルニ折衷主義ニアリテハ刑罰ハ犯罪事實ニ基キテ法律秩序ヲ維持シ利益ヲ保護スル爲メ之ヲ科スルモノナリト論決スルノデアル、惟フニ刑罰ハ犯罪豫防ノ手段ニシテ、亦應報ナルベシ、而テ其豫防ハ特別及一般ノ兩方面ヲ併セテ觀察セザルベカラズ、然ニ一方ニ偏シテ極端ナル應報主義、極端ナル豫防主義ヲ主張スルハ空論ニ屬スベシ、我國新刑法ノ如キモ、舊刑法ニ比シ、遙ニ多クノ點ニ於テ特別豫防主義ノ要求ヲ容レラレタリト雖モ、極端ナル片面觀ヲ貫徹シタルモノニアラズ、結局雙面的折衷主義ノ見地ヲ採ラレタルモノト認ムベキデアアル、

(泉二博士ノ刑法大要等ニ據ル)
(山岡博士ノ刑法原理等ニ據ル)

以上各學派ノ所論斯ノ如シ、之ヲ要スルニ舊學派ハ絕對主義即チ應報主義ノ刑罰ヲ必要ナリト論ジ、新學派ハ相對主義即チ目的主義ノ刑罰ヲ主張スルノデアアル、然レドモ予ハ折衷主義ニ從フヲ可ナリト信ズ、何トナレバ折衷主義ノ説ク所ハ佛教ニ所謂ル懲惡勸善説ト符合スレバナリ、抑佛教ノ懲惡勸善トハ三世諸佛ノ通則ニシテ、之レヲ時間ニ約スレバ善惡應報ハ個人ノ招ク所ナリト雖モ、國家ガ過去ノ善ニ賞シ、過去ノ惡ニ罰スルハ、頓テ現在及將來ニ對スル懲惡勸善ニシテ、又之レヲ空間ニ約スレバ即チ社會ニ對スル懲惡勸善デアアル、加之ズ、佛國著名ノ刑法學者「ヲルトラン」氏モ左ノ如ク云ツテ居ル、

抑善惡應報ハ自然ノ定則ナリ、此定則ヲ行ヘバ吾人心中ニ愉快ヲ感ジ、若シ此定則ニシテ行ハレザル時ハ吾人ノ心中不平ヲ覺フ、此感情ハ即チ絶對主義ノ根據ト爲スモノナリ、然レドモ人心ヲ正フスルヲ説明スルノミニシテ、何ノ故ニ刑罰ヲ行フヤ、或ハ國家ガ何ノ故ニ保存セザルベカラザ

ルヤヲ説明セズト辯駁シ、左ノ問答ヲ以テ其主義ヲ説明セリ、

イ、罪人社会ニ問テ曰ク、何故ニ汝ハ予ヲ罰スルカ、

ロ、社会答テ曰ク、是レ汝ガ招ク所也、(絶対主義又ハ應報主義ト云フ)

イ、罪人問テ曰ク、何故ニ汝ハ手ヲ下スカ、何者ガ汝ヲ裁判官ト爲シ、又ハ行刑官ト爲スカ、

ロ、社会答テ曰ク、是レ予ガ保存ヲ計ル爲ナリ、(相對主義又ハ目的主義ト云フ)

又獨逸ノ刑法學者「ベルネル」氏モ始メハ絶対主義ノ主唱者ナリシモ、後ニハ折衷主義ヲ唱道シテ左ノ如ク論決セリ、

國ニ刑罰アルハ即チ人ノ天賦固有ノ性質ニ基キシモノト謂ハザルベカラズ、故ニ人民全體ニ満足ヲ來スハ刑罰其モノニ於ケル第一ノ目的ナリ。所謂善惡ノ行爲ニ論ナク正當ノ應報ヲ爲シ、以テ人民一般ニ満足ヲ與フルハ國家ノ本分ナリ、(絶対主義)然レドモ刑罰ハ善惡ノ應報ヲ以テ人心ヲ満足セシムルヲ以テ足レリトセズ、一方ニ於テハ其犯罪人ヲ改良シテ善ニ遷

ラシメ、他ノ一方ニ於テハ他人ヲモ脅嚇スルノ二原素ヲ附加シテ、初テ刑罰ノ實行ハ其當ヲ得タルモノト謂フベシ、(相對主義)故ニ刑罰ハ一般人民ノ満足、改良、脅嚇ノ三原素ヲ具ヘザルベカラズ、(折衷主義)而シテ人民ノ満足ハ根元ニシテ他ノ二原素ハ之レヲ實行スル際ニ於ケル直接ノ目的也、止

依之思之ニ、折衷主義ノ合理說ナルコト彌々以テ明ラカナリ。然ニ刑罰ノ主義ハ假令ヒ善美ヲ盡スト雖モ、若シ時代ト國情ニ適セザレバ其益スル所尠カルベシ、故ニ「ミツテルマイエル」氏ハ刑罰主義發達ノ沿革ヲ概論シテ曰ク、

刑罰ノ主義ハ、復讐ニ起リ、脅嚇ニ中シ、正義ニ終ル、乃至其主義方法ニ就テハ時勢國情ノ如何ニ依リ、或ハ脅嚇主義ヲ必要トシ、或ハ矯正主義ヲ適當トスル場合アルベク、苟クモ其場合ニ於ケル、正義公道ノ要求ヲ充タスニ足ルモノハ即チ之レヲ以テ最良ノ主義ト認定スルヲ得ベク、必ズシモ絕對的ニ何レヲ可トシ何レヲ不可ト斷定スルコト固ヨリ至難ナリ云々又「ス

ベンサー氏ハ彼ノ峻刑酷罰ハ其本質ニ就テ論ズレバ不正ハ即チ不正ナリト雖モ野蠻社會ニ於テ之レヲ用ヒザレバ法令行ハレズ犯罪ハ益々繁殖シ其影響スル所ハ遂ニ無辜ノ民ニ慘害ヲ蒙ラスニ至ルベシ是レヲ以テ野蠻社會ニ於テ峻刑酷罰ヲ用フルハ即チ其當時ノ正理公道ノ要求ヲ充タスモノナリト謂ハザルヲ得ズト云ヘリ、

蓋シ現今ニ於テハ文化ノ進歩ニ伴ヒ社會ハ益々複雑ヲ來セリ此時代ト國情ヲ觀ズレバ折衷主義ノ刑罰ヲ彌々適當ナリト思料セラレハナリ、

第三節 行刑ノ主義ト其効果

行刑ノ主義ハ、遇囚問題トシテ最モ困難トスル所デアル、既ニ學說トシテハ、感化主義ト懲戒主義ノ二派アリテ、相互ニ論難ノ鋒ヲ交フト雖モ、何レモ自說愛染ノ妄執ニ僻シテ、未ダ其正鵠ヲ得ザルモノ、如シ、今ヤ繁キヲ厭ハズ、二者論難ノ概要ヲ舉グ來リテ、最後ニ之レガ採擇ヲ決セント欲スルノデ

アル、先ヅ初ニ懲戒主義者ノ論難左ノ如シ、

感化主義トハ、嚴格ナル規律ノ下ニ、宗教教育等ノ方法ニ依リテ精神ヲ改良シ、又作業勞力ニ依リテ、放蕩無賴ノ念ヲ斷タシメ、勤勉自活ノ心ヲ養成シ、出獄後再ビ社會ニ復歸セシムルコトヲ目的トス、而シテ此主義ノ起原ハ、古來ニ於ケル殘忍酷薄ナル刑罰(符嚇主義)ノ反響ニシテ、囚人モ亦人ナリ、焉ゾ之レヲ獸視シテ殺生ヲ事トセンヤ、宜シク之レヲ感化シテ再ビ社會有用ノ人タラシムベシト、宗教的觀念ヨリ遂ニ感化ヲ以テ、監獄制度ノ直接方法ト爲スニ至ル、依テ歐米各國ニ於テハ、此感化主義ヲ採用スルト同時ニ其効果ヲ奏セン爲メ、監獄制度以外ニ尙有力ナル救貧事業、感化事業、保護事業及慈善團等ヲ設立シ、以テ監獄制度ヲ後援補佐シ、内外相待テ感化主義ノ効果ヲ顯著ナラシムト謂フ、然ニ我國ノ如キハ監獄構造ノ不完全ニシテ、理想ノ如クニ囚人ヲ拘禁スルコト不能ニ屬シ、又後援補佐ヲ爲スベキ社會事業ニ至リテモ、未ダ幼稚ニシテ到底彼我同一ノ論ニアラズ、而

シテ感化主義ヲ實行セント欲セバ、先監獄トシテモ、其構造ニ於テ巨額ノ經費ヲ要スルコト、少ナクモ彼ノ白耳義監獄ノ如クナラザルベカラズ、既ニ同監ニ於テハ一房ニ付、六百圓ヲ要シ、又米國監獄ノ如キハ一房ニ付、千五百圓ト云フ巨額ノ經費ヲ要シテ居ルヲ以テ、之レヲ我國ニ及ボサバ遂ニ一國ノ財政ニ大影響ヲ來タスノ恐レアリ、加之ズ作業ノ如キ勤勉自活ノ良習慣ヲ養成スルニアリト雖モ、實際我國監獄ノ狀況如何ヲ按ズルニ、例ヘバ男囚ニシテ機械、又ハ葦工、蘭苴、經木、真田、糸結等ノ作業ニ從事セシムルモ、果シテ出獄後之レヲ利用シテ自活シ得ラル、ヤ否ヤ、歐米ノ如キハ在監中ノ作業ノ趣旨ヲ全フセンガ爲ニ、私立ノ放免會社其他團體ノ力ニ依リ、其獄内ニテ習得シタル業種ニ應ジ、資金、機械等ヲ貸與シ、以テ自活ノ途ヲ講ズル等ノ設備アリテ、再犯ノ餘地ナカラシムルニ至レルモ、我國ニ於テハ未ダ其設備完全セザルナリ云云、

マタ感化主義ノ結果ニ就テハ、却テ犯罪増加セリトテ下ノ如ク例證セリ、

西曆千九百七年(明治四十一年ニ當ル)獨逸國政府ノ發表シタル統計ニ依レバ、最近二十三年間ノ犯罪數ハ非常ノ増加ヲ示シタリ、以前ハ人口一萬毎ニ、百四人ノ犯罪者ナリシガ、増加シテ百廿四人トナレリ、而シテ犯罪ノ種類ハ國民一般ニ富ノ程度増進シタル結果トシテ、竊盜ハ著ルシク減少シタルモ、殺傷ハ甚ダ多ク、詐欺取財モ亦二割ノ増加ヲ示スニ至レリ、又米國ニ於テモ同年ノ統計表ニ依ルニ、昨年度(千九百零六年)ニ於ケル犯罪事件ハ著ルシク増加シ、殺人罪九千三百五十人、土人慘殺六十九人、自殺一萬百廿五人ニシテ、拐帶詐欺ニ依レル贓額ハ、千四百七十三萬四千八百六十三弗ニ達シ、既往ノ統計ニ比較シ増加ノ傾向ヲ示セリ、我國ニ於テモ明治四十年及四十二年四月現在員ニ付發表セラレタル統計ニテハ、初犯累犯共ニ増加ノ傾勢ナ

リ、云云(監獄實務詳解、抄出)

白耳義國法學博士「アドルフ・プリンス」氏ハ、最近刑法論(四六頁)ニ云ク、最近五十年ノ間歐洲ニ於ケル犯罪ノ増加、並ニ再犯者増加ノ割合ノ非常ナルコ

トハ、監獄制度ヲ以テ一般ノ豫防ノ効果ナキヲ認ムルニ足ル、現時各國ノ監獄内部ハ寛大ナル奢侈ニ近ク、貧者ヲシテ生存競争ノ途ヲ探ルヨリ、寧ロ監獄生活ノ勝レルニ如カザルモノト誤信セシムルノ傾向アリ、云云

古賀廉造氏ハ、刑法新論^(七八〇)ニ曰ク、犯罪ハ社會ノ公敵ナリ、犯人ハ良民ノ大讎ナリ、然ニ社會ハ却テ此犯罪ヲ保護シ、此犯人ヲ憐憫シテ、或ハ刑事訴訟法ニ於テ、或ハ監獄則ニ於テ、犯人ノ利益ヲ計ルコトニ汲々タラザルハナシ、甚ダシキニ至リテハ、裁判官ニ於テモ、檢察官ニ於テモ亦犯罪人ニ不利シテ社會ヲ保護スルノ觀念ヲ失望シ、寧ロ社會ヲ損害シテ犯罪人ヲ救護セント欲スルノ傾向アリ、乃至現今監獄改良論者輩出シ、刑罰ノ目的タル犯人ノ痛苦ヲシテ益減少セシムルコトヲ務メテ得意トセリ、蓋シ痛苦減少説ハ、百年以前ノ歐羅巴、若クハ三十年前ノ我國ニ於テ唱道セシハ、或ハ多少益スル所アリシモ、今日ノ如ク監獄制度ノ稍整頓セル時代ニ於テハ却テ反對ノ弊害ヲ見ントスルニ至レリ、想フニ論者ハ事ヲ計ルニ良民

ニ薄クシテ却テ惡民ニ厚ク、善人ヲ愛セズシテ反テ惡人ヲ憐マントスルニ非ザルナキヲ得ンヤ、論者試ニ想ヘ今日社會ノ趨勢ハ倍々人口ノ増加ヲ來シ、各人生活ノ困難亦日々ニ急迫ヲ加ヘ、生存競争ノ結果、其那邊ニ底止スルヲ知ラズ、於是乎、大ニ貧富ノ懸隔ヲ生ジ、富者ハ倍々富ミ、貧者ハ倍々貧、其極殆ド生活ヲ爲ス能ハザル者多數ヲ占ムルニ至リ、社會黨ノ勃興故ナキニアラズ、彼ノ罪ヲ犯ス者其先天的ニ出ヅル者ハ暫ク之ヲ措キ、誰レカ自カラ罪辟ニ陥ルヲ好ンデ、而シテ犯罪ヲ行フ者アラシヤ、必ヤ飢渴其身ニ迫リ、之ヲ醫スルノ途ナキヨリ忽チ不良ノ念ヲ起シ、遂ニ良民ヲ害スルニ至ルモノナリ、若シ此等ノ者ニシテ刑罰ノ痛苦ハ飢渴ノ困難ヨリ甚ダシク、獄中ノ勞役ハ社會ノ生存競争ヨリ恐ロシキコトヲ知ルアラバ、生活上如何ナル困難ヲ見ルモ、尙刑罰ノ痛苦ニ優ル所アリトシテ大ニ其困難ニ堪フルコトアルベシ、然ラバ今日犯罪ノ數益々増加シテ、監獄其負擔ニ堪フル能ハザルニ至ラントスル所以ノモノハ、監獄ノ制度其宜シキ

ヲ得ザルニ原因セズンバアラザルナリ、乃至爾來監獄ヲ改良シテ、一層峻
 嚴ナル痛苦ヲ加ヘント欲スルナリ、止

以上列記ノ論難ニ徴スレバ、感化主義ハ寛大奢侈ニ失シテ其効果薄弱ナル
 ニ似タレドモ、現行ノ感化主義ナルモノハ、懲戒ニ離レザル感化ニシテ、寛大
 奢侈ニ失スルモノニ非ズ、又犯罪ノ増加モ獨リ感化主義ノ罪ニアラズ、古代
 及中古ニ於ケル脅嚇的峻刑ヲ以テ殘酷ナル痛苦ヲ加ヘタル時代ト雖モ、却
 テ犯罪數ヲ増加シタル實跡ハ覆フベカラザル所デアル之レヲ要スルニ獄
 制ハ如何ニ善ナリト雖モ、運用其宜シキヲ得ザレバ益スル所尠ナシ、施政亦
 良ナリト雖モ、社會ノ狀態ニ適セザレバ其効ヲ奏スルコト薄弱デアアル故ニ
 犯罪ノ増加モ決シテ感化主義ノ罪ニアラズト知ルベシ、此ヲ以テ法學博士
 小河滋次郎氏ハ監獄學(七九)ニ云ク、若シ夫レ文明ト犯罪ノ種類ノ關係ニ就
 テ之ヲ稽查スルニ、文明ノ發達ハ民産ヲ驅リテ上層少數者ノ掌裏ニ湊合シ、
 下層多數ノ民衆ヲシテ、困迷貧苦ノ悲境ニ陥ラシメ、機械力ノ進歩ハ次第ニ

人カヲ節シテ殊ニ多數職工者ノ生業ヲ奪ヒ、身ニ技能アリ、力能ク勞苦ニ堪
 フベキ所ノモノスラ、尙之ヲ用ヒテ糊口ノ道ヲ得ルニ由ナク、經濟上ノ窮乏
 ハ終ニ財産ニ關スル犯罪ノ増殖ヲ招來スルニ至リ、又文明ノ進歩スルニ從
 ヒ、社會生計ノ程度漸ク昂騰シ、一方之レヲ充タスノ資ヲ得ルノ道益々限縮
 シ、終ニ幾多ノ壯丁ヲシテ結婚ノ希望ヲ達スルコト能ハザラシムルガ爲ニ、
 彼ノ情欲ノ發動ハ勢ヒ正徑ヲ脱シテ岐路ニ入り、其結果風俗ニ關スル犯罪
 ノ増加ヲ顯出スルニ至リ、其他又文明ノ進歩ハ勢ヒ個人的自主自由ノ觀念
 ヲ勃興セシメ、終ニ或ハ國權ニ對シ、公益ニ關シ、若クハ名譽信用等ニ關スル
 犯罪ヲ増加スルノ結果ヲ誘致スルニ至ラシムルヲ免カレズ、之レヲ要スル
 ニ文明ノ進歩ニ伴隨シテ、犯罪ノ増加スルハ恰モ水勢ノ高キヨリ低キニ就
 クガ如シ、之レヲ防止抑制センコト頗ル至難ナリト謂ハザルヲ得ズ、文明國
 ニ於ケル刑法及行刑當局者ノ任モ亦至重至難ナリ止ト、此說眞ニ其正鵠ヲ
 得タルモノト謂フベシ、

次ニ感化主義者ノ論難トシテハ、感化ハ行刑ノ目的ニシテ行刑ノ主義ニアラズ、故ニ行刑ノ目的ヲ達スルニハ單純ナル懲戒ノミニ止マルベカラズ、或ハ道義的ニ、或ハ宗教的ニ、或ハ教育的ニ、或ハ脅嚇、或ハ懲戒、或ハ利益、或ハ防衛、或ハ矯正等、種々ナル要素ヲ調和併行シテ、始メテ感化ノ効ヲ奏スルノデアアル、依テ行刑主義ノ原則トシテハ、學者ノ定論左ノ如シ、

- 一、 刑罰ノ執行ハ公平ナルヲ要ス、
- 二、 刑罰ハナルベク犯罪ノ性質ニ符合スルヲ要ス、
- 三、 刑罰ハ威嚇ノ原素ヲ備フルヲ要ス、
- 四、 刑罰ハ教誨歸正ノ原素ヲ備フルヲ要ス、
- 五、 刑罰ハ一身ニ止マラシムルヲ要ス、
- 六、 刑罰ハ分割シ得ベキヲ要ス、
- 七、 刑罰ハ償補ン、若クハ取消スヲ得ベキ性質アルヲ要ス、
- 八、 刑罰ノ苦痛ハ遙ニ犯罪ノ愉快ニ超ヘザルベカラズ、

- 九、 刑罰ノ苦痛ハ經過的ノモノタルヲ要ス、
- 十、 刑罰ハ囚徒ノ身体精神ニ永久ノ害ヲ及ボヌ可ラズ、
- 十一、 刑罰ハ再犯ヲ防守スルノ性質ヲ有セザル可ラズ、
- 十二、 刑罰ハ放免後生活ノ資ト爲ルベキ慣習ヲ作ルヲ要ス、
- 十三、 刑罰ハ經濟ノ主義ニ適フヲ要ス、

現今我國ニ於ケル行刑ノ原則モ、以上ノ十三則ノ外ニ出デザルベシ、既ニ懲戒主義者ト感化主義者ノ論要斯ノ如シ、然レドモ懲戒主義者ガ監獄構造ノ不完全ヤ、社會救濟事業ノ未發達ヲ以テ感化主義ヲ排斥スルガ如キハ、恰モ角ヲ矯メントシテ牛ヲ殺スニ等シ、故ニ予輩ハ寧ロ積極的ニ未發達ノ事業ハ發達セシメ、不完全ナル構造ハ着々改築ノ方法ヲ講ズルコトヲ希望ス、加之ズ彼レ犯人ハ固ヨリ非社會性ノモノナレバ、國權ノ尊嚴ナルコトヲ示シ、以テ之レヲ懲戒スル所以ハ即チ感化改良ノ目的ヲ達スルニアルベシ、而シテ懲戒ノ性質トシテハ、自カラ二個ノ意味アリテ、其一ヲ主觀的ト

ス、即チ犯人自身ヲシテ刑罰ノ恐ルベキコトヲ自覺セシムルノデアル、語ヲ換フレバ彼レガ自由ヲ停止シテ、嚴格ナル規律ノ下ニ作業ノ督勵ヲ爲スハ彼レノ爲ニハ苦痛ニシテ、此苦痛ニ加フルニ教誨教育ヲ以テセバ、其苦痛ノ中ニ良心ヲ啓發シテ生スル所ノ結果ハ即チ悔悟デアル、此悔悟コソ頓テ改悛ノ基礎ニシテ、即チ行刑威化ノ目的ヲ達シ得ラレタノデアル、而シテ、其二ハ客觀的デアリテ、之レハ一般豫防デアル、即チ一ノ犯人ヲシテ萬人ノ犠牲タラシメ、以テ一般ノ犯罪ヲ未發ニ防ガザルベカラズ、依之前途威化ノ見込ナキ者モ犯罪アレバ必ラズ之レヲ罰シ、又偶發犯者ニシテ、發覺當時直ニ悔悟ノ念ヲ生ジテ再犯ノ虞ナシト雖モ、之レニ刑罰ヲ科スルハ、皆是一般豫防ノ目的ニ出デタルモノデアル、サレバ以上二種ノ意味ハ次ノ如ク、前者ハ行刑ノ本旨ニシテ、後者ハ刑法ノ本旨ト謂ハザルベカラズ、故ニ懲戒ト威化トハ不一不異ニシテ、何レニモ偏スベキモノニアラズ、我國現行法規ノ趣旨モ亦タ爰ニ存スルモノト知ルベシ、

第四節 行刑ノ要素ト教誨

犯人ノ多數ハ物質欲ニ囚ハレテ、確乎タル宗教ノ信念ナク、射倖若クハ虚榮ニ走リテ精神ノ修養ヲ怠リ、起居動作不規律ニシテ國法ヲ重ンズル觀念乏シク、或ハ遊惰ニシテ業務ニ忠實ナラズ、或ハ衣食ニ節制ナクシテ衛生ノ思念薄シ、斯ノ如ク生活狀態ニ於テ習慣的惡性ヲ有スルヲ以テ、或ハ野蠻的ニ、或ハ文明的ニ、種々ノ犯罪ヲ構成スルニ至ルモノトス、依テ之レヲ懲戒威化シテ良民タラシメント欲セバ、先ヅ自由刑ヲ科スルヲ以テ適當トスルコトハ東西各國其軌ヲ一ニスル所デアル、而シテ其自由刑ナルモノハ犯人其者ノ自由ヲ拘束スル所以ニシテ、此刑ヲ執行スルニハ教誨規律作業衛生ノ四大要素ヲ具備セザルベカラズ、是即、教誨ハ其信念ナキ暗黒ナル心裏ヲ照シテ徹底的ニ自覺ヲ與ヘ、規律ハ嚴正ニ勵行シテ不規律ナル生活ヲ矯メ、作業ハ督勵ヲ嚴ニシテ其惰性ヲ責メ、衛生ハ衣食動作ノ節制ヨリ洗滌灑拂ニ

至ル迄皆其度ヲ守ラシメテ、以テ過去ノ習慣的惡性ヲ善化セシメザルベカラズ、於此乎泰西諸國ニ在リテモ、千八百四十六年ニ、萬國會議ヲ「フランクフルト」ニ開設シタル結果、囚人ニ作業ヲ課シ、教誨ヲ與ヘ、教育ヲ授ケ、運動ヲ許シ、或ハ典獄僧侶醫士等ヲシテ屢々監房訪問ヲ爲スベキ斷案ノ下ニ「ペンシルブアニア」制ノ分房拘禁法ヲ是認シタノデアル、

我國ニ於テハ畏クモ、明治天皇一視同仁ノ御聖德ヨリ、維新革正ト俱ニ囚徒教養ノ途ヲ開カセ給ヒテ、明治三年十二月ニハ新律綱領ノ發布ト同時ニ徒場規則及學舍規則ヲ定メラレテ、徒囚ニハ工作ノ餘暇ヲ以テ習字讀書ヲ許サレ、又人倫五常ノ道ヲ講ズルコトニナリタノデアル、而シテ教養ノ方法トシテハ、最初ノ時代ハ極單純ニシテ、漸次精密ニ及ビシコトハ、東西何レモ同一ナリト雖モ、殊ニ我國ノ如キハ明治革新以後今日ニ至ル、上下殆ンド五十有餘年ノ間ニ於テ、獄制ノ改良ハ、教誨ノ進步ヲ促シ、教誨ノ實績ハ、行刑ノ面目ヲ一新シ、兩々相待テ、斯道ノ改良ニ貢獻シ來リシコトハ、覆フベカラザル事實ニシテ、既ニ教誨開始ノ手續トシテモ、東京ニ於テハ、明治五年七月眞宗大谷派ノ僧越前仰明寺ノ對岳ナル者、犯罪人ノ說教ヲ教部省ニ出願シ、同年八月許可ヲ得テ、徒場佃島ニ於テ、毎月一六ノ日ヲ說教日ニ定メ、九月一日ヨリ說教ヲ開始ス、又名古屋ニ於テハ、明治五年七月眞宗大谷派ノ僧乘西寺啓潭ナル者、囚徒說教ヲ、愛知縣知事徳川慶勝公ニ出願シ、許可ヲ得テ、毎月二回說教ヲ開始ス、當時ノ許可狀ハ左ノ如シ、

書面之趣聞届候條、先ヅ爲試驗、東京府ノ徒場ニ於テ說教可爲致、就テハ前以テ同府廳へ一兩名出頭申付、實地施行之手續等篤ト可爲承合候事、

(教部省指令)

啓 潭

右隆盛ノ聖化ヲ感戴シ、國恩ノ萬一ニ報ゼンガ爲メ、例月二回教育徒刑ノ二場及獄中等へ罷越シ、三條大旨ヲ主トシ、交フルニ佛教因果應報ノ說ヲ以テ衆徒ニ說諭シ、過去ヲ懺悔シテ改心自新ノ地ニ導キ度申立之趣奇特

ノ儀ニ付聞届候精々説導作興之功可相立候事、(愛知縣指令)

其他各府縣ニ於テモ教誨開始ノ手續ハ大同小異ニシテ粗ボ斯ノ如シデア
ル、而シテ行刑ノ四大要素ハ何レモ其輕重ヲ論ズベキニアラズト雖モ、教誨
ハ内部精神ノ開蒙ヲ主トシ、規律、作業、衛生ハ外部行動ノ改良ヲ主トス、然ニ
外部ノ行動ハ内部精神ノ支配スル所ナルガ故ニ、之レヲ本末ニ區分スレバ
教誨ハ本ニシテ、規律、作業、衛生ハ末ニ屬スト云ハザルベカラズ、古語ニ云ハ
ズヤ其本亂レテ末治マルモノハアラジト、然レバ精神ノ教養ニ重キヲ置キ
以テ教誨ノ周到、教育ノ普及ニ意ヲ用フルコトハ、蓋シ行刑ノ目的ヲ達スル
ニ庶幾カラシカ、

第五節 死刑ト教誨

自由刑ハ懲戒感化ヲ目的トスルガ故ニ、教誨ハ行刑要素ノ随一トシテ缺
カスベカラズト雖モ、死刑ハ自由刑ニ異リテ刑死セシムルヲ目的ト爲スガ

故ニ教誨ノ必要ナカルベシ、故ニ我國監獄法及監獄法施行規則ニハ、死刑ノ
宣告ヲ受ケタル者ヲ被告人ノ中ニ攝シテ別ニ死刑者ニ對スル教誨ノ明文
ナシ、而シテ被告人ノ教誨ハ被告其人ノ請願ニ依リテ施行スル規程ナレバ、
死刑者ト雖モ教誨ヲ請願セザレバ之レニ教誨ヲ施スコト能ハズ、依之論者
或ハ云ハン自由刑者ハ活カシ置キテ改惡歸善セシムルニ由リ教誨ノ必要
ヲ生ズト雖モ、死刑者ハ殺シテ仕舞フニ由リテ教誨ノ必要ヲ生ゼズト、予ハ
之レヲ難ジテ曰ク、論者ノ説ノ如キハ、一ハ畏クモ一視同仁ノ聖旨ニ背キ
一ハ人道ノ本旨ニ悖ルニアラズヤ、抑死刑ト自由刑トハ罪惡ノ輕重ニ依
ルモノニシテ、人ノ上ニ於テ論ズベキモノニアラズ、固ヨリ罪惡ハ憎ムベシ
ト雖モ、人ハ憎ムベキモノニアラザルベシ、故ニ教誨ヲ以テ其人ノ精神ヲ開
導シ、暗黒界ヨリ光明界ニ救ヒ出ダスコトハ兩刑何レモ同一デナクテハナ
ラス、是即チ罪惡ノ上ニハ輕重ノ別アリテ、刑罰ヲ異ニスト、雖モ、人ノ上ニハ
毫モ輕重ノ別ナク、共ニ開化得道セシメ給フガ、一視同仁ノ聖旨デアル、又

人道ノ本旨ヨリ論ズルモ、自己ノ罪惡ヲ自覺セシメズシテ、死ニ至ラシムルコトハ甚ダ殘酷デアアル、然ル所以、ハ死刑ノ宣告ヲ受ケタル者ハ自由刑ニ異リテ、第一ニハ生命欲、第二ニハ名譽欲ガ非常ニ強クナリテ、控訴、上告、再審ト、法ノ許ス限リハ上訴哀願ニ餘念ナク、或ハ神佛ニ祈願シテ死ヲ免カレシコトヲ念ズルモノデアアル、然レドモ上訴哀願ハ棄却トナリ、神佛ノ祈願モ利益ナシ、彌々死刑ニ確定スレバ恰モ狂氣ノ如ク、或ハ愚痴ノ暗地ニ沈淪シ、他ヲ怨ミテ反省ノ餘地ナク、或ハ自暴自棄ニ陥リテ當局ニ抵抗ヲ試ミ、或ハ逃走ヲ企テ、或ハ暴言ヲ吐キ、以テ刑場ニ醜態ヲ演ズルコトハ見ルニ忍ビザルモノアリ、然ニ之レニ教誨ヲ施シテ其迷妄ヲ破シ、以テ罪惡ヲ自覺セシメテ、佛陀ノ救濟ニ安心立命セシムルニ至レバ、身ハ鐵窓ノ下ニ在リ乍ラ、心ハ淨土ニ住ミ遊ビ、寒風激シキ冬ノ日モ、暑熱ニ苦シム夏ノ夜モ、報恩ト感謝ノ念ニ打タレテ、謹慎念佛スルニ至ルヲ常トス、斯ク教誨ニ導カレテコソ、刑場ニ於テモ從容トシテ惑ハズ、當局ニ對シテモ一點ノ怨ミヲ含マズ、專ヲ懺悔

ノ誠意ヨリ清キ辭世ヲ遺サレハナシ、是レ偏ニ教誨ノ恩澤ニシテ、畏クモ一視同仁ノ聖旨ニ契ヒ、又人道ノ本旨ニ順ズルモノト謂ハザルヲ得ズ、此ヲ以テ、予ハ明治三十二年七月始メテ死刑者教誨ノ必要ヲ論ジ、之レヲ上司ニ建議シテ遂ニ容レラル、所トナリテ以來、其成績ヲ實地ニ顯明スルニ至レリ、而シテ同三十六年四月ニハ、司法省訓令監秘發第三〇號ヲ以テ、職務規程ヲ定メラレタ、其中、第三十八條ニ於テ、死刑宣告ヲ受ケタル者ニ對シテハ、慎重ノ注意ヲ以テ教誨ヲ行ヒ、特ニ精神ノ慰安ヲ圖ルベシト明示サル、ニ至リタノデアアル、

然ニ其教誨ノ方法トシテハ、教誨師其人ノ建案ニ依ルト雖モ、猶之ガ研究ノ餘地ハアルベシト思フ、然ル所以ハ、或ル監獄ノ如キハ、死刑執行ノ當日、其刑場ニ於テ執行ノ言渡終リタル後簡單ニ一遍ノ教誨ヲ加フルモアリ、又ハ監房ニ就テ最後一遍ノ教誨ヲ加ヘ置ク所モアル、斯ノ如キハ形式ニ止マリテ其効果ナキヲ認ム、予ハ多年ノ實驗ニ徴スルニ、死刑者ニハ特ニ個人教誨

室ヲ設ケ、毎日ノ如ク死刑者ヲ其室ニ入レテ、佛陀ノ偉大ナル人格ニ接觸セシメ、屢々讀經又ハ教誨ヲ聽聞セシメテ心機ノ轉換ニ勗メザルベカラズ、語ヲ換ヘテ云ハ、其性格、宗教信念及教育ノ程度、犯罪ノ原因及犯狀、其他親族ノ關係及個人ノ來歴等ニ基キ、適切ニ教誨ヲ施ザバ、如何ナル惡漢モ必ラズ感化シ得ラル、モノデアル、何事モ平生業成デアリテ、臨終ニ到ラザル前ニ於テ、能ク教誨ヲ施シテ、諸有ル其迷執ヲ説破シ、安心立命ノ地ニ達セシメテ置カネバナラヌ、斯クシテコソ刑場ニ於ケル一言ノ教誨モ、非常ナル効能ガ顯ハル、ノデアル、故ニ予ハ從來死刑者アレバ直ニ之レガ教誨ニ着手シ、執行前ニ於テ必ラズ感化シ了ル、而シテ執行當日ニハ更ニ死刑者ヲ教誨室ニ入ラシメ、佛前ニ於テ法名授與式ヲ行フ、此時本人ハ彌々今日コソ現世ノ終リト覺悟シ、頓ニ顔色ヲ變ジテ落涙雨ノ如シ、或ハ法衣ノ袖ヲ握リテ悲泣ノ聲ヲ發シ、或ハ父母妻子ニ會見ヲ訴ヘテ、日延ベヲ哀願スル者モアル、或ハ空ヲ掬ンテ悲哀ノ涙ニ咽ブ者モアル、其悲惨ノ狀況ハ人々不同ナレドモ、其心

底ヲ探リ來レバ、生命欲ト愛別離苦ノ所爲ニシテ、既ニ佛陀ニ救濟セラレテ安心立命ノ地ニ達シ居リタル者ト雖モ、唯今死ナネバナラヌトスレバ、病衰者ヤ自殺者ニアラザル者ハ、此苦痛ガ殊ニ甚ダシイノデアアル、我が宗祖見眞大師ガ苦惱ノ舊里ハ捨テ難ク、未ダ生レザル安養ノ淨土ハ戀シカラズ候コソ、能ク能ク煩惱ノ興盛ニテ候、等ト示サセラレタノモ、能ク符合スル所デアル、然レドモ此時ニ於テ、其逆上シタル思念ヲ沈靜シテ、悲痛ノ情ヲ救フ所ノ教誨ノ秘訣ヲ知ラザレバ、却テ狂亂セシムルニ至ルベシ、而シテ精神落居シタル後ニハ、其場ニ於テ親族ヘノ遺書ヤ、遺留金品ノ下渡願、又ハ社會公益ノ爲ニ死體ノ解剖願、又ハ辭世及謝罪狀等ニ至ル迄本人ノ希望ニ應ジテ之レヲ書カシメ、法名ト俱ニ懷中ニ收メサセ、佛前讀經及教誨ヲ終ヘルヤ、手ニ珠數ヲ抓グリ、口ニ念佛稱ヘツ、戒護官吏ニ挨拶シ乍ラ勇ンデ刑場ニ歩ミ行ク、其姿ヲ見レバ哀レニモ亦殊勝デアリテ、予ハ此死刑毎ニ慈悲の目に憎しと思ふ人ぞなし、答ある身こそ猶あわれなりノ古歌ヲ思ヒ出サズニ居ラレ

ナクナルノデアル、然レドモ社會ノ安寧ヲ維持スルニハ、如何ニ改悛ノ念厚クトモ、死刑ノ執行ハ亦止ムヲ得ザル道理ニシテ、此悲惨ノ最後モ他ノ一方ニ益スル所、蓋シ大ナルベシト信ズ、然リ而シテ其死ニ就クヤ、從容トシテ一禮ヲ陳ベ、懷中ノ辭世及遺書等ヲ提出シテ、懺悔ノ誠意ヲ表シ終レバ彌々執行ニ着手スルニ依リ、其寸隙ニ於テ、大聲一言以テ最終ノ教誨ヲ加フルノデアル、其時死刑者ハ假令ヒ心ガウロウトシタノデモ、忽チ本心ニ復シテ「ハ、イアリガタフゴザリマス」ト答ヘルヤ、專ラ念佛ノ聲ヲ發スル様ニナル、而シテ絞臺ニ立ツヤ、絞機一聲ガタン「ト響ケバ、其レガ此世ノ終リナレドモ、四大五蘊ガ離散スル爲メ、苦シム所ノ斷末磨ノ峠ハ短カキハ十三分、長キハ十六七分ニテ越へ過ギルノデアル、此時場内參列ノ人ハ此悲惨ノ狀況ニ打タレテ寂然トシテ聲ナク、心竊カニ念佛ヲ申スノデアル、

第二章 教誨ノ要旨

第一節 教誨ノ原語

我國ニ於テ、始メテ教誨ノ語ヲ用弁ラレシハ、明治十四年改正ノ監獄法規デアル、然レドモ其語ノ典據ヲ明ラカニシタル學說アルヲ聞カズ、偶々是レアルモ、或ハ英、佛、獨ノ翻譯語ナリト謂フ、果シテ然ルカ、予ハ此說ニ左袒スルコトヲ得ズ、然ル所以ハ、外國語ニハ我國ノ教誨ト云フ熟語ニ適中スルモノナケレバナリ、然ニ和英字書ニハ英語ノ「アドモニション」ヲ教誨ニ當テ、箴メテアレドモ「アドモニション」ハ英和字書ニ勸告、訓誡、說諭、諫言ノ多種ニ譯シテアル、又或說ニハ「インストラクション」ニ當テ、箴メルト雖モ、之レヲ英和字書ニ、教訓、教練、教令、訓令ノ多種ニ譯シ、又教誨師ノ原語ヲ英語ノ「チャブレーション」ニ當テ、箴メルト雖モ「チャブレーション」ハ英和字書ニ、小禮拜堂ノ住職、小會

堂ノ教師、陸海軍帝玉貴顯ノ邸ニ在ル禮拜堂ノ教師、陸海軍議員、慈惠院等ニ屬スル、牧師ノ多種ニ譯シテアル。

其他獨逸語ノ「デイーゲフエングニースブレダイクト」或ハ「ゼールゾルグ」ル、佛國語ノ「セルピースレリジエー」ニ教誨ノ語ヲ當テ箴メルト雖モ、是等モ典據トハ云ヒ難シ、然ラバ我國教誨ノ用語タル、其典據如何ト云フニ、曰ク淨土眞宗正依ノ經タル大無量壽經下卷五惡段ノ文是ナリ、經ニ曰ク佛言其五惡者、世間人民、徒倚懈惰、不肯作善、治身修業、家室眷屬、飢寒困苦、父母教誨、瞋目怒鷹、言令不和、違戾反逆、譬如怨家、乃至愚癡、矇昧而自以智慧、不知生所從來、死所趣向、不仁不順、惡逆天地、而於其中、怖望僥倖、欲求長生、會當歸死、慈心教誨、令其念善、止トアリ。

此經文ハ仁義禮智信ノ中、第五ノ信ヲ失フ罪惡ヲ誡メ、以テ教誨セラレタル所デアアル、抑モ信ハ四時ノ徳ニ則ル所ニシテ、春ハ花咲キ、秋ハ實リ、夏ハ暑ク、冬ハ寒ク、古往今來、其約束ヲ違ヘザルハ四時ナリ、人亦タ其徳ニ順フテ言

行ノ違ハザルヲ信ノ道トス、此信ヲ勸メ、此信ヲ重ンズルハ佛教ニシテ、華嚴經ニハ信爲道元功德母ト説キ、論語ニモ、子曰、人而無信、不知其可也、大車無輓小車無輒、其何以行之哉、ト云ツテアル如ク、仮令ヒ仁義禮智ノ四ヲ具フト雖モ、若シ信ノ一ヲ失フニ至ラバ、修身齊家ハ不可能デアアル、眞宗俗諦ノ教義ハ此經文ニ依ルモノニシテ、治身修業ノ四字、殊ニ教誨ノ眼目デアアル、監獄囚人ノ多數ハ徒倚懈惰、不肯作善、治身修業ノ者ニシテ、信ノ道ヲ失フタノデアアル、之ヲ改惡歸善セシムル爲ノ説法故ニ、經文ノ如ク教誨ノ熟語ヲ用井テ監獄教誨、又ハ教誨師ノ名稱ヲ法規ノ上ニ掲ゲラレタノデアアル、然レドモ、予ハ猶予ガ研究ノ足ラザルナキヲ虞レ、大正七年一月監獄學ノ先輩小河博士ニ一書ヲ呈シテ、之ヲ質シタルニ、同博士ハ左ノ回答ヲ寄セラレタレバ、其全文ヲ記シテ後學ノ參考ニ供スベシ。

拜復益御清祥奉賀候、陳者御問合之監獄教誨之語原ノ件ニ付テハ、御意見之通、大無量壽經之父母教誨トカ、慈心教誨トカ申ス所ニ出デタルコト疑

ヒナキ義ト存ジ候。

外國ニテハ教誨ノコトヲ監獄ニ於ケル説教トカ、又ハ宗教的勸行トカ稱シテ、格段ナル言葉ヲ用ヒ不申候、從テ教誨師ノコトモ監獄ニ於ケル僧侶トカ、説教師トカ唱フルガ通例ニ御座候。

英語ニテハ「インストルクシヨン」〔教養〕「レリジャーヌ」〔宗教的〕宗教的教養ノ意味ナリ。

獨語ニテハ「ゼールズルゲ」〔ゼール〕ハ精神「ゾルゲ」ハ保護又ハ教養ノ義ナリ。

佛語ニテハ「セルビスレリジエー」〔セルビス〕ハ勸行。

「レリジエー」ハ宗教的、宗教的勸行ノ意義ナリ。

監獄制度上ニ於ケル教誨師ノ用語。

英「チャブレーション」

獨「ゼールズルゲル」又ハ「ゲフエングニース、ガイストリツヘー」。

佛「ラーモニエ」。

伊太利「カベラニー」。

右貴答マテ勿々拜復。

二月二十八日

小河生

然レバ我國ニ於ル監獄法規上ノ教誨及教誨師ノ用語ハ、外國語ノ翻譯ニアラズ、其典據ハ即チ大無量壽經ナリト決スベシ。依之觀之、監獄ノ教誨モ悉ク佛教殊ニ眞宗僧侶ニ依リテ貢獻シ來リシト云フモ、亦タ偶然ニアラザルナリ。

第二節 教誨ノ意義

普通説法ノ名稱ハ、説教又ハ演説ノ語ヲ用フト雖モ、監獄ニ限リ、特ニ教誨ノ語ヲ用井ラル、ヤ必ラズ其意義ナカルベカラズ、抑説教ト云ヘバ其宗派ニ限ル所ノ安心門ノ説法ヲ主トス演説ト云ヘバ自己主張ノ意見ヲ公衆ニ

發表スル所ニ用フルヲ常トス、又近年ニ至リテハ更ニ講演或ハ講話ノ名稱流行スト雖モ、是レハ學術研究的ニ談話ヲ爲スニ過ギズ、而シテ其對象ノ機ハ何レモ普通良民ナリト謂ハザルベカラズ、然ニ監獄ニ於テハ特ニ大無量壽經五惡段ニ據リテ教誨ノ語ヲ用井ラル、ヤ必ズ其所以ナキニアラザルベシ、以下少シク其經文ニ就テ意義ノアル所ヲ研究セント思フノデアアル、經ニ云ク、世間人民徒倚懈惰、不肯作善、治身脩業、乃至慈心教誨等トアリテ、其對象ノ機ハ普通ノ良民ニアラズ、恩ニ背キ義ニ違シテ、信ノ徳ヲ失ヒタル不仁不順ノ惡人デアアル、之ヲシテ改惡歸善セシムルニハ、慈心教誨ノ語ヲ以テス、典據ノ經文既ニ斯ノ如シ、故ニ監獄教誨ノ語モ經文ノ如ク、惡逆無道ノ民ヲシテ改惡歸善セシムルヲ目的トスルニ依リ、佛陀慈心ノ教誨タラザルベカラズ、サレバ教誨ノ意義ハ實ニ深重ニシテ普通ノ說法ニ異ナル所アルヲ知ラザルベカラズ、左ニ其大要ヲ揚ゲテ研究ノ資ト爲ス。

一、教誨ハ親切慈愛ヲ以テ其機ニ投ジ、習性的惡癖ヲ矯正セザルベカラ

ズ、

理由、彼レ囚人ハ惡事ヲ爲シタルガ故ニ、社會ハ之レヲ憎ミ、監獄ハ之レヲ責ムルモノト決意ス、然ニ教誨ハ其意ニ反シテ惇キ同情即チ親切慈愛ノ涙ヲ以テ其機ニ投ズルコト屢ナレバ、彼等ハ心底ヨリ其教誨ヲ服膺シ、遂ニ多年ノ習慣性タル惡癖ヲ矯正スルニ至ルノデアアル、

二、教誨ハ個人ノ智識ト、性格ニ應ジテ、適切ナラザルベカラズ、理由、教誨ハ應病與藥ノ如クナラザレバ、如何ニ同情惇ク慈愛ノ涙ヲ以テ導クト雖モ其効果薄弱ナルガ故デアアル、

三、教誨ハ積極的ニ啓蒙指導スルヲ要スト雖モ、或ハ消極的ニ其猜疑、煩悶ノ心裏ヲ照シテ、自省ノ念ヲ起サシメザルベカラズ、

理由、集合教誨ハ積極的ニ愚蒙ヲ啓發シ、度世ノ要訣ヲ指導スト雖モ、個人教誨ハ消極的ニ其胸中ヲ看破シ、常ニ心裏ニ伏在セル猜疑、又ハ煩悶ノ念慮ヲ氷解セシメ、翻然悔悟歸善ノ念ニ轉換セシメザルベカラズ、由來獄内ノ椿

事ハ多ク囚人ノ猜疑ト煩悶ニ起因スル所ニシテ、若シ教誨ヲ以テ之レヲ氷解セシムルニアラザレバ、益々悪化シテ遂ニ大事ヲ惹起スルガ故デアアル、

四、教誨ハ迷信ヲ説破シテ、徹底的正信ニ入ラシメ、以テ精神ノ脩養ニ努

メ、四恩ニ報フル所ノ生活ヲ爲サシメザルベカラズ、

理由、囚人ハ各自ニ其宗旨ヲ名乗ルト雖モ、多クハ無信教デアアル、偶々神佛ヲ信仰スト雖モ迷信ニシテ、未ダ正信ヲ知ラズ、故ニ教誨ハ其迷信ヲ説破ンテ正信ニ入ラシメ、以テ堅實ニ精神ノ脩養ヲ積マシメ、終世四恩(國王ノ恩、師恩、父母ノ恩、衆生恩)ニ報フル所ノ生活ヲ爲サシメザルベカラズ、

五、教誨ハ常識ノ養成ニ努メ、以テ治身修業ノ道ヲ講ゼザルベカラズ、

理由、囚人ノ多クハ遊惰放逸ニシテ不規律ナル生活ヲ爲シ、治身修業ノ道ヲ知ラザルガ故デアアル、

六、教誨ハ堅實ナル信念ヲ養成シ、以テ忠君愛國ノ思想ヲ確實ナラシメザルベカラズ、

理由、囚人ノ多クハ小恩ニ感ジ易クシテ大恩ヲ知ラザルモノトス、故ニ堅實ナル信念ヲ養成シテ、最モ大ナル所ノ國家ノ恩惠ヲ貫徹セシメ、忠君愛國ノ思想ヲ確實ニ發達セシメネバナラヌノデアアル、

七、教誨ハ囚人ノ在監中ニ、出獄後ニ於ケル自活ノ道ヲ講ゼシメ、保護就業ノ方法ヲ計ラザルベカラズ、

理由、囚人ハ刑餘不信用ノ爲ニ、適當ノ就業先、又ハ監督上ニ於ケル適任者ナキモノヲ多シトス、故ニ在監中ニ於テ出獄後ノ保護就業方法ヲ教誨シ、自營自活ノ道ヲ得セシメ、以テ行刑ノ目的ヲ達セシメネバナラヌノデアアル、要スルニ教誨ハ行刑ノ要素ニシテ、規律作業ト相待テ遇囚ノ生命ト云フコトヲ得ベシ、然レドモ規律作業ハ外形ニ於ケル強制手段ナルガ故ニ、囚人ハ之レニ服従スト雖モ、必ラズシモ之レニ悦服スルモノデハナヒ、而シテ兇惡猛暴ノ徒ニ至リテハ、巧ミニ此外形ノ檢束ニ堪ヘ、出デ、ハ社會ニ害毒ヲ流シ、入リテハ規律ノ下ニ服従シ、殆ンド監獄ヲ以テ自己ノ住所タラシムル

モノ、如シ、若シ其レ監獄ヲシテ單ニ拘禁場又ハ作業場タラシムル場合ハ格別ナルモ、苟クモ懲戒感化ノ主義ヲ以テ、監獄ノ目的トスルニ於テハ、當ニ外形ニ於ケル強制手段ノミヲ以テハ到底其目的ヲ達シ得ベキモノデナヒ、必ズ其内部ヨリ惡念ヲ排除シ、以テ良心ヲ養成スル所ノ方法ヲ講ゼザルベカラズ、是レ即チ佛陀ノ慈心教誨ヲ必要トスル所以デアアル。

第三節 教誨ノ要訣

教誨ノ要訣ハ種々ノ議論アリト雖モ、集合及個人ノ別ナク、之レヲ概シテ云ヘバ、教誨師其人ノ親切熱心ニアリ、而シテ相當ノ學徳ト地位ヲ有シテ、常ニ一般囚人ニ敬慕セラル、所ノ人格アルヲ要ス、然レドモ教誨ノ要訣ハ、人格ノミヲ以テ論ズベキニアラズ、人格ノ上ニ、猶左ノ條件ヲ具備セネバナラヌノデアアル。

一、集合教誨

- (イ) 教誨堂ハ尊嚴ヲ保ツ程度ニ於テ、多數ノ囚人ガ信仰スル對象佛ヲ安置シ、教誨毎ニ宗教ノ儀式ヲ行ヒ、以テ敬虔ノ念ヲ生ゼシムルヲ要ス、
- (ロ) 教案ハ簡短ニシテ其要旨ヲ明瞭ニ説キ、言語ハ最モ平易ニシテ、智愚平等ニ領解セシムル様ニ説及セザルベカラズ、
- (ハ) 教材ハ新古ノ實例等博ク東西兩洋ニ涉リテ、適宜採擇スルヲ要スト雖モ、其合法ニ注意セザルベカラズ、
- (ニ) 對機ハ罪人ナリト雖モ、同胞ノ觀念ヲ以テ對向スルヲ要ス、

二、個人教誨

- (イ) 個人ノ心性及親族ノ關係、並ニ犯罪ノ原因等ヲ知悉シ、時機ヲ逸セズ、適切ニ教誨ヲ施スヲ要ス、
- (ロ) 其人ニ因リ恰好時機ニ投ズト雖モ、破邪顯正ニ全力ヲ竭シ、以テ心機ヲ轉換セシメザルベカラズ、
- (ハ) 教誨ハ間斷ナク之レヲ施スベシト雖モ、囚人自身ガ無聊ヲ慰スル爲

ニ種々ノ質問ヲ起シテ教誨師ヲ勞シ、而カモ其教誨ニ心服セザルモノアルヲ察知スルヲ要ス。

(三) 陰險猥惡ナル囚人ハ、教誨師其人ヲ觀ルコト機敏ニシテ、動モスレバ、囚人自身ノ術策ニ籠絡セント企ツルコトアリ、若シ其策ニ陥ル時ハ不慮ノ災厄ヲ招クコトアレバ、之レヲ注意セザルベカラズ。

教誨ノ要訣大略斯ノ如シ、故ニ教誨師ハ適當ノ人ヲ精選シ、其地位勞力ニ相當スル俸給及禮遇ヲ以テ、之レヲ待タザルベカラズ、抑人ヲ感化教養スル責任ハ、概シテ困難ニシテ重且大ナリト雖モ、殊ニ監獄教誨ノ職責ハ其最タルモノ、一ニ屬ス、然ル所以ハ彼レ罪囚ヲ教誨スル如キハ、恰モ石田ニ耕種スルト一般ニシテ、勞スル所多キ割合ニ獲ル所甚ダ少シ、當局者ノ苦心焦慮實ニ想フベキナリ、然レドモ此苦心ニ耐へ、此困難ニ打勝チ終ニ彼ノ無縁ノ衆生ヲ濟度スルコソ實ニ教誨師ノ本職ニシテ、苟クモ其職ニ在ル者ハ全力ヲ以テ之ニ盡シ、着々其教誨ノ實績ヲ顯揚スルニ至ラシムルノ決心ガナケ

ネバナラヌ、而シテ教誨師一身ノ舉動ハ、忽チ罪囚一般ニ影響スルモノタルヲ銘記シ、其品行ハ平素極メテ端正且精勵ニシテ、諸事スベテ全監獄少ナクモ罪囚直接ノ規矩トナリ、模範トナルベキ志操ヲ持タネバナラヌノデアル、

第三章 教誨ノ主義

第一節 道義ト宗教

世人動モスレバ、囚人ハ非社會性ニシテ、人道ヲ過チタル者ナルガ故ニ、監獄ノ教誨ハ人生本然ノ義務ヨリ、人生百般ノ現象ヲ説明シ、以テ囚人ノ惡心ヲ排除シテ、常識ノ養成ニ努メザルベカラズ、故ニ専ラ道義教誨ヲ要スト論ズル者アリ、然レドモ之ヲ實驗ニ徵スレバ、道義教誨ニ偏スルヨリモ、寧ロ宗教的教誨ヲ原則トシテ、之ニ道義ヲ兼スルヲ以テ、其効果ノ優レルヲ知ル、然ル所以ハ囚人ノ多クハ未ダ無窮ノ存在ヲ認メズ、換言スレバ神佛ノ照覽ヲ悟ル能ハズシテ、彼等ハ口ヲ開ケバ則チ云ク、人生五十寧ロ太ク短ク娛ンデ、

而シテ死スルニ如カズト、絶望既ニ斯ノ如シ、犯罪ノ止ム能ハザル事深ク怪ムニ足ラズ、然レドモ彼モ人ナリ誰レカ一片ノ宗教心ナカラシヤ、時ニ即チ神佛ヲ呼ブ、俚諺ニ云ハズヤ、人窮スレバ則チ神佛ニ倚頼スト、是レ人類ニ宗教心ノ存スル所以ニシテ、此神佛ニ倚頼スル所ノ宗教心ヲ養成シテ、恆久ニ存續スルニ至ラシメバ、彼レハ遂ニ罪惡ヨリ離脱スルコトヲ得ルノデアアル、
 「ホーメル」曰ク、吾人人類ノ救ヒヲ神ニ求ムルノ切ナル、恰モ猶餓ヘタル雛鳥ノ嘴ヲ用井テ食ヲ求ムルガ如クナリト、彼レ囚人モ亦人類ナルガ故ニ、受刑ノ苦ニ耐ヘザル瞬間ニ於テハ、救ヒヲ神佛ニ求ムルニ至ルハ頓テ神佛ヲ信ズルノ端緒ニシテ、此機ヲ逸セズ轉迷開悟セシムルハ、即チ宗教ノ力デアアル、殊ニ眞宗ノ教旨ハ他ノ宗派ニ異リテ、眞俗ニ諦相資デアアル、故ニ他力信仰ニ入レバ必ラズ神佛ノ照覽ニ惶レ、自己ノ罪惡ヲ懺悔スルニ依リ、人道ハ自カラ守ラル、ノデアアル、此ヲ以テ、釋迦ハ經ノ始ニ如是我聞ト説キ、龍樹ハ佛法ノ大海ニハ信ヲ以テ能入トスト釋シ、又華嚴經ニハ信ハ道元功德ノ母ト説

ク宜ナル哉、信仰ニハ其心ヲ繋グ所ノ本尊アリ、本尊ノ在ル所ニハ一點ノ疑ヒヲ容ル、ヲ許サズ、信仰ハ即チ轉迷開悟ノ存スル所ニシテ、其存在ハ堅固ニシテ且永久的デアアル、然ニ若シ單純淺薄ナル道義教誨ノミニ偏セバ、理屈ニ走リテ、疑ヒ之レニ依テ起リ、其疑ヒノ在ル所、迷ヒ自カラ此ニ生ズルガ故ニ、道義ノミノ教誨ハ極メテ巧妙ナリト雖モ、聽者ノ感動鈍ク、宗教的教誨ハ輕妙ニシテ而カモ容易ニ俗衆ノ頑耳ヲ聳動スルニ依リ、効果最モ偉大ナルモノデアアル、素ヨリ惡人濟度ノ如キハ、普通凡俗ノ容喙スベキ所ニアラザルベシ。

第二節 教誨ト信教ノ自由

監獄官教科書實務要領第三章ニハ、現今ノ實況ニ依レバ、教誨師ヲ撰擇スルノ途ハ、獨リ佛教ニ限ルモノ、如シ、乃至信教ノ自由ハ昭カニ大憲ノ定ムル所ニシテ、囚人ト雖モ之レガ自由ヲ奪フコトヲ得ザルモノナリ、乃至又其

教誨師タルモノハ獨リ佛教ノ僧侶ニ限ラズ、適當ナル者ヲ廣ク採擇シテ、以テ之レニ充テザルベカラズ、乃至監獄教誨師タル者ハ、神官ニマレ、僧侶ニマレ、又牧師ニマレ、其宗派ノ如何ニ拘ラズ、其人ノ何タルヲ問ハズ、誠ニ囚人ヲ感化スルニ足ル名望有徳ノ人士ニシテ、教誨師タルヲ望ム者アラバ、禮ヲ厚フシ辭ヲ卑フシ、之レヲ歡迎シ、其任ニ該ラシムベキナリ、云云ト論ジテアリ、是レ一往ハ道理アルニ似タレドモ、甚ダ淺薄ナル議論ニシテ、論者ハ未ダ事實ニ疎キ結果ニ外ナラズ、予ハ之レニ對シテ以下少シク辨駁ヲ試ミント欲ス。

抑我國民ノ多數ハ佛教徒ナルガ故ニ監獄ノ囚人モ佛教有縁ノ者ヲ多シトス、依テ教誨師ヲ撰擇スルノ途ハ、勢ヒ佛教僧侶ニ限ラザル可ラズ、加之ズ、此問題ニ就テハ、第十三回帝國議會(明治三十二年三月四日)ノ開議ニ於テ、佛耶教誨ノ議案出デ、甲論乙駁、大ニ議論ヲ戰ハシタル結果、基督教ノ牧師ヲ任用シテ、政府監督ノ下ニ教誨師タラシムルコトヲ不當トシテ之レヲ排斥シ、多數決ヲ

以テ佛教僧侶ニ限定セラレシコトハ、衆議院議事速記録四十二號官報號外ヲ以テ、當時既ニ公示セラレタルモノナリ、然リ而シテ佛教ノ中ニ於テモ、眞宗ノ信徒ハ大多數ヲ占ム、故ニ之レヲ歴史ニ徵スルモ、遠ク明治五年ヨリ、幾多ノ勞力ト多大ノ金錢ヲ惜マズ、銳意監獄ノ教誨ニ貢獻シ來リシモノハ、獨リ眞宗本願寺アルノミ、然ニ論者ハ監獄ノ教誨ヲ佛教僧侶ニ限定セバ、信教ノ自由ヲ奪フコトニナルトテ、之レヲ論難スルガ如キハ、淺薄ナル皮相ノ見解ニシテ、全ク道理ニ暗ク、且又事實ニ疎キヲ表現シタモノデアアル、何トナレバ、監獄ニ於テハ、或ル一ノ宗派ニ據テ、積極的ニ教誨ヲ施スマデニシテ、異宗派ノ囚人ガ獨リ其歸依スル所ノ宗教ヲ信奉スルハ、固ヨリ消極的ニシテ之レヲ禁遏スルガ如キコトアラザルガ故ナリ、加之ズ、囚人ハ宗教ノ有縁無縁ヲ論ゼズ、既ニ法禁ヲ犯シテ刑辟ニ觸レタル所ノ者ナルガ故ニ、皆是レ無信教ノ徒ト見テ可ナリデアアル、故ニ信教ノ自由ヲ妨グル嫌ヒハ、毫モ之レ有ルコト無シ、況ンヤ教誨ノ目的トスル所ハ、最多數ノ囚徒ヲ改惡歸善セシムル

ニアルガ故ニ、仮令ヒ少數ノ異宗教ニ縁アル者アリト雖モ、此少數者ノ爲ニ大目的ヲ阻止セシムルガ如キハ、大ニ慎シムベキ所デアル、然ニ論者ハ此ニ心ヲ措カズシテ、教誨師タルモノハ、獨リ佛教ノ僧侶ニ限ラズ、適當ナル者ヲ廣ク採擇シテ、各宗派ヲ混用セヨト主張スト雖モ、斯ノ如キハ即チ少數者ノ爲ニ、大ナル目的ヲ犠牲ニ供スルノ愚ヲ學ブ者ト謂ハネバナラス、然リ而シテ若シ論者ノ説ノ如ク、各宗派ノ僧侶及神官、又ハ牧師ヲ教誨ニ混用ストスレバ、監獄ハ恰モ宗教ノ博覽會ニシテ、昨日ハ耶蘇牧師ノ説法ヲ開キ、今日ハ佛教僧侶ノ教壇ヲ設ケ、明日ハ神官ノ祭壇ニ換ヘネバナラス、同ジ佛教中デモ昨日ハ題目ヲ唱ヘタル口ニ、今日ハ念佛ヲ稱ヘ、明日ハ眞言陀羅尼ヲ誦スルト云フ有様ニテ、囚徒ヲシテ殆ンド信心ノ歸依スル所ナキニ苦マシメ、或ハ滑稽ノ笑ヲ招キ、終ニ教誨ノ効果ハ皆無ニ屬スルノデアアル、故ニ歐米ニ於テモ基督教ニ屬セザル他ノ宗徒、若クハ無信教者ニ對シテハ、唯ニ基督教ノ牧師ヲ以テ教誨ヲ施サシムルノミデアアル、若シ教誨ヲ一種ノ宗教家ニ限定

スルヲ以テ、信教自由ノ旨義ニ悖ルモノトスレバ、歐米ニ於テモ新舊基督ノ外ニ三種若クハ四種ノ宗教ヲ混用セザルベカラザルベシ、然ニ未ダ混用セザル所以、亦此ニ存ス、聊カ彼此對照シテ論者反省ノ資ニ供ス、殊ニ我國ト歐米トハ、宗教上ニ於ケル國情モ、歴史モ、大ニ異ナル所アルヲ以テ、愛國ノ士ハ大ニ此ニ注意ヲ拂ハネバナラスノデアアル、本來我國ノ憲法ハ異宗教者ノ前ニ佛教ヲ説クベカラズトノ旨趣ニアラズ、即チ教法ハ客觀的ニシテ、説クト説カザルトハ、教誨師其人ノ自由デアアル、而シテ信教ノ自由ハ主觀的ニシテ、聞教ノ人ニ信否ノ自由ヲ保證サレタノデアアル、カラ監獄ノ教誨ハ唯一宗派ノ人ニ委スルモ、毫シモ憲法ノ精神ニ悖ラザルモノト知ルベシ。

第三節 結論

行刑ハ自由拘束ヲ本旨トシ、囚禁ヲ方法手段ト爲ス、而シテ其自由ヲ拘束シ、囚禁ヲ強フル所ノ範圍ハ監獄法規ノ定ムル所ニシテ、是ガ法規ノ執行ハ

最モ公正峻嚴ナラザルベカラズ、故ニ監獄官吏ハ、飽迄規律ヲ厲行シ、猶衛生ニ害ナキ限リハ作業ヲ督勵シテ苦痛ノ感ヲ深カラシムルト同時ニ、刑罰ノ怖ルベキコトヲ自覺セシメ、ネバナラス、然レドモ教誨ハ其畏嚇ト相並行シテ行刑ノ二大要件タルコトヲ忘ルベカラズ、固ヨリ刑罰ハ一般豫防ヲ重ンズベキガ故ニ、行刑ノ方法モ、或ハ特別豫防ニ偏シテ、一般豫防ノ効力ヲ殺グガ如キコトハ吾人ノ採ラザル所ナレドモ、歐米各國ノ如ク、宗教的教養ヲ以テ、更ニ一段ノ改善ヲ加ヘ、累犯防止ニ資セント欲セバ、我國ハ我國體民情ニ適スル所ノ宗教即チ佛教ノ教誨ヲ採ラザルベカラズ、而シテ佛教ハ受刑者ノミニ止マラズ、監獄官吏ノ精神修養上ニ及ボス利益モ、亦偉大ナルモノデアル、故ニ教誨師ノ員數モ監獄ノ大小ヲ鑑ミ、相當ノ配置ヲ爲シ、以テ教誨ノ周到ヲ計ラネバナラス、然リ而シテ其人員ニ就テハ種々ノ考案アリト雖モ、予ハ從來ノ實驗ヨリ之レヲ論ズレバ、囚人ノ出入頻繁ニシテ且分房數ノ多キ大監獄ノ如キハ、少ナクモ囚人三百人ニ對シ、教誨師一人ノ割合ヲ以テ配

置セザレバ到底教務ノ周到ハ期シ難キモノデアル、要スルニ規律、教誨、衛生ハ行刑上ノ三尊ナリト雖モ、唯ニ形式ノミニ止マリテ、實際的之レガ活動運用ニ缺タル所アリテハ、行刑ノ目的ハ達シ得ベキニアラザルベシ。

刑教相關論 終

大正九年二月十一日印刷
大正九年三月十五日發行

〔非賣品〕

不許轉載



著者 光弘祐言

發行者 光弘靈雄

本籍地 福井縣足羽郡麻生津村三番地
寄留地 名古屋市中區石神堂町拾番地

印刷者 箕浦甚五郎

名古屋市中區南葵服町貳丁目廿一番地

印刷所 秀文社

名古屋市中區南葵服町貳丁目廿一番地

刊行費寄附者 佛子恒禪

發行所

名古屋市中區石神堂町甲拾番地

東洋佛教學會

382
86

終